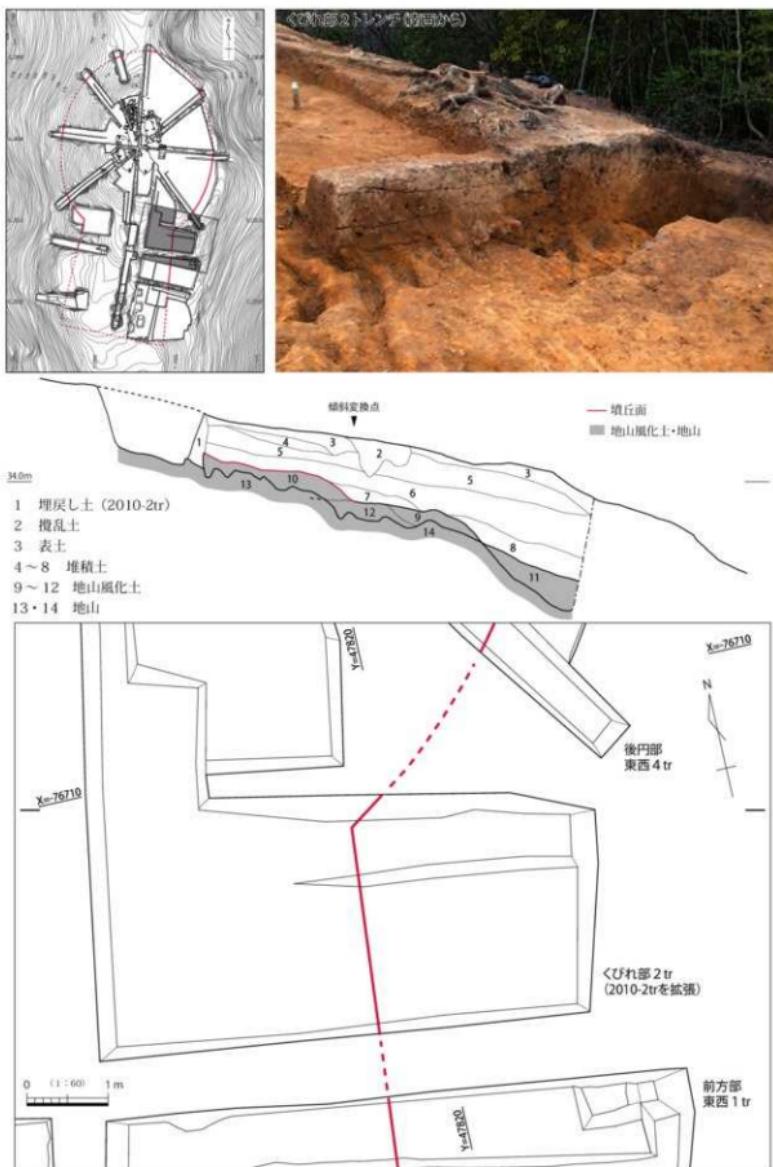
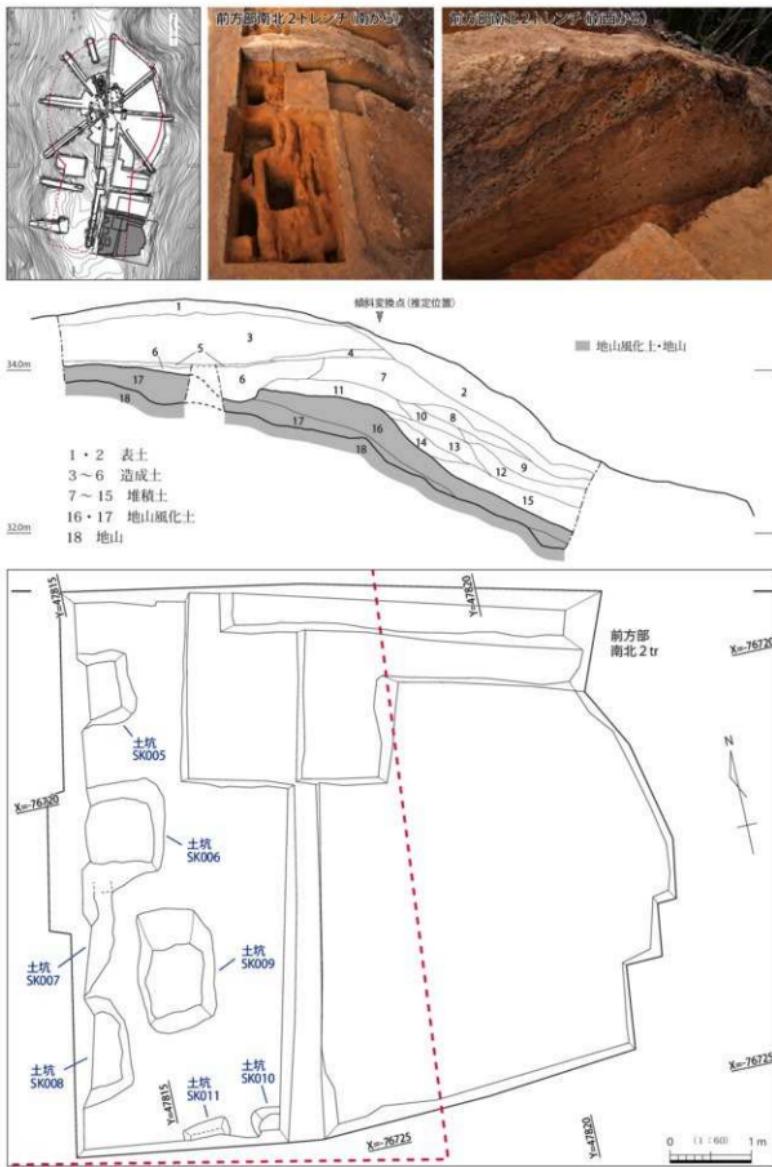


第22図 くびれ部1トレンチおよび前方部東西2トレンチ(東壁)平面図・土層断面図



第23図 くびれ部2トレンチ平面図・土層断面図



第24図 前方部南北2トレンチ平面図・土層断面図

前方部東西1・2トレンチおよび前方部南北1-2トレンチ（第25図）

前方部東西1・2トレンチおよび前方部南北1-2トレンチでは、主に前方部東西の墳丘端部について確認する。

前方部東西1トレンチでは、表土（4層）と堆積土（5～12層）の下に地山（32層）および地山風化土（17～23層）が確認でき、墳丘面は地山風化土（17・19層）の上面を想定した⁽¹⁰⁾。墳丘端部は地山風化土（19層）上面の東端部付近に認められた傾斜変換点であると考えられ、土層堆積状況で墳丘端部をもとにトレンチ内を全面的に精査して墳丘端部ラインを復元した。また19層上面の中央付近は緩やかな段状になっている様子が分かる。これは地山風化土を削り出して前方部を成形しようとした痕跡を示していると思われる。

前方部東西1トレンチの堆積土（7層）からは弥生土器の小片が出土した（第29図1・2）。時期は弥生時代後期末頃に比定でき、2017年度に島根県教育委員会が発掘調査を行った弥生時代の集落跡と近い時期にあたる。このことから、弥生時代の集落に関する何らかの遺構がこの辺りまで存在したが、古墳の築造や後世の造成などで削平された可能性が考えられる。なお、東側の堆積土がかなり厚い状況であるが、後述する後世の墓道に伴う造成などの掘削土が堆積した状況であると推測できる。

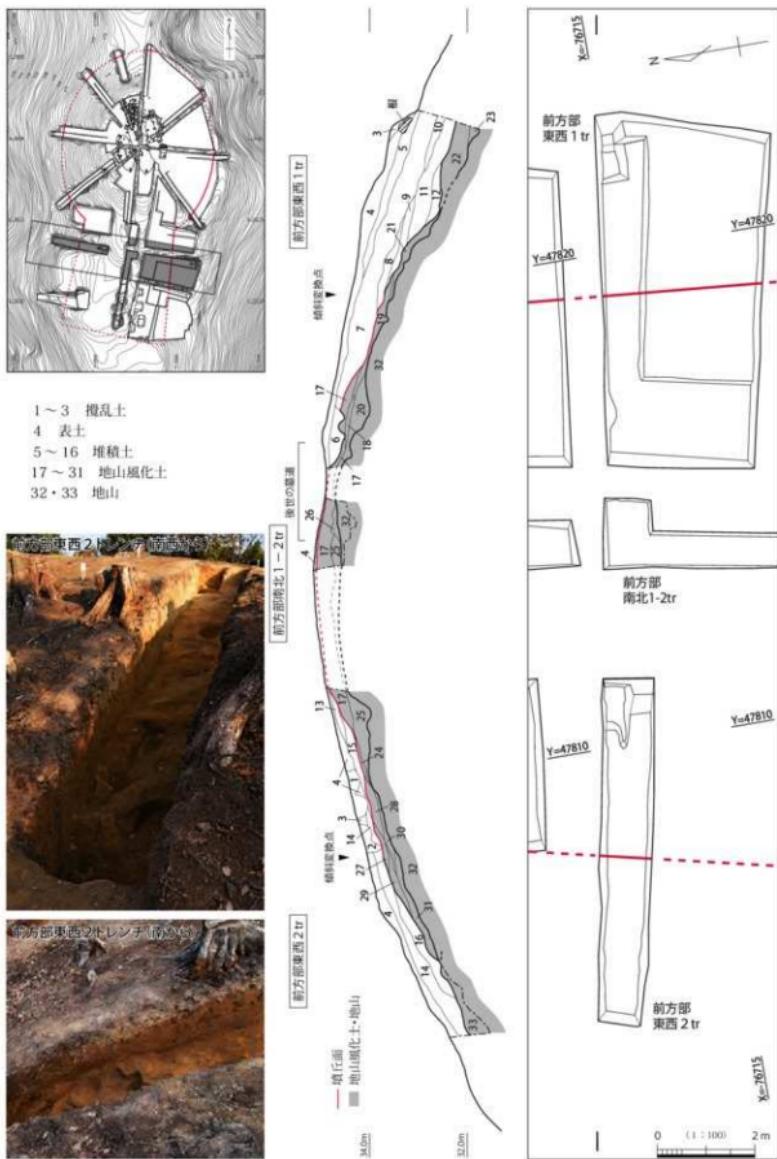
前方部東西2トレンチの土層堆積状況は、前方部東西1トレンチと概ね同じ様子が確認できる。表土（4層）と堆積土（13～16層）が認められ、その下に地山（32・33層）および地山風化土（17・24・25・27～31層）が存在する堆積状況を示している。なお、根による擾乱土（1～3層）からは、陶磁器（第29図7）が出土した。墳丘面は地山風化土（17・24・27・28層）の上面であり、墳丘端部は27層上面の傾斜変換点であると捉えた。また17層上面の中央付近をみると、緩やかな段状になっている様子が観察できる。これは地山風化土を削り出して前方部を成形した痕跡であり、前方部東西1トレンチで確認した状況と対応する。

前方部南北1-2トレンチは、表土（4層）直下に地山（32層）および地山風化土（17・25・26層）が存在し、地山風化土（17層）上面が墳丘面であると考えられる。また前方部南北1-2トレンチと前方部東西1トレンチの間は削平されて表土（4層）が窪んで堆積しており、後円部東西1・2トレンチの上層断面図（第19図）で確認した後世の墓道がここでも確認できる。

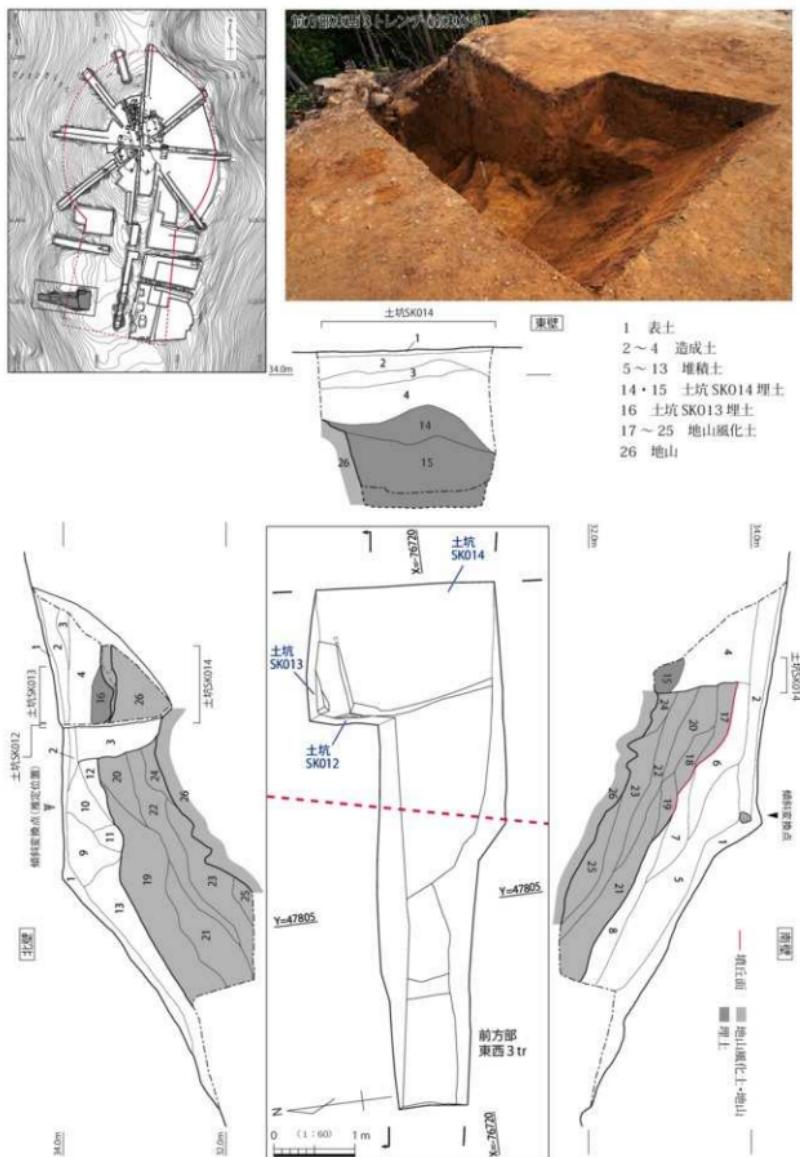
前方部東西3トレンチ（第26図）

前方部東西3トレンチは、前方部東西2トレンチの土層堆積状況で確認した墳丘端部を前方部の南側で確認するため、丘陵の東西幅が最も広がる位置に設定した。

トレンチ北壁の東側の見通しでは、表土（1層）の下に造成土（2～4層）が確認でき、その下に土坑SK012とSK013が確認される。土坑SK013では、埋土（16層）も認められる。また土坑SK014の掘形も同時に存在し、トレンチ内では合計で3基の土坑が認められた。地山（26層）はこれら3基の土坑によって掘り込まれた状況が確認できる。これらは後世の墓地造成に伴う土坑である。西側では表土（1層）下に造成土（2・3層）と堆積土（9～13層）があり、その下には地山（26層）および地山風化土（19～25層）が確認できる。また墳丘面は地山風化土（19層）上面であったと考えられるが、後世の造成で削平された部分が大きいため、明確な墳丘面は確認できなかった。



第25図 前方部東西1・2トレンチおよび前方部南北1-2トレンチ平面図・土層断面図



第26図 前方部東西3トレンチ平面図・土層断面および見通し図

トレンチ南壁の土層堆積状況は、表土（1層）下に造成土（2・4層）と堆積土（5～8層）がみられ、その下に地山（26層）および地山風化土（17～25層）が確認できる。地山は土坑SK014の構築によって掘り込まれ、その埋土（15層）が認められる。墳丘面は地山風化土（17～19層）上面で、19層上面の傾斜変換点が墳丘端部であると考えられる。なお、堆積土（5層）からは、陶磁器（第29図6）が出土した。

トレンチ東壁においては、表土（1層）および造成土（2～4層）の下に土坑SK014が確認でき、地山（26層）が掘り込まれて土坑SK014が形成されている様子が分かる。土坑SK014内部では2層の埋土（14・15層）を確認した。

前方部南北3トレンチでは南壁で墳丘端部を確認した。この墳丘端部と前方部東西2トレンチの土層推積状況（第25図）で認められた墳丘端部を結んだ墳丘端部ライン南側の延長線上に前方部の裾があると想定できる。トレンチ南側の丘陵地形を見ると、東西幅がかなり狭まっており、墳丘端部ラインを最大限に南側に伸ばした場合、狭小になる手前部分が前方部南側の裾部であった可能性が高い。よって、その部分を前方部南側の墳丘端部であったと想定して墳丘端部ラインを想定した。

5 後世の墓地造成の確認

これまでの各トレンチ内では、常楽寺柿木田1号墳における墳丘構造の把握を進めてきたが、そのなかで前方部の各トレンチ（前方部南北1～2トレンチ・南北2トレンチ・東西3トレンチ）で後世の墓地造成に伴う土坑が合計で14基（土坑SK001～SK014）見つかった（第17・18・24・26図）。古墳の墳丘構造とは直接的に関連しないが、古墳の立地する丘陵が後世にどのような土地利用がなされたのかを把握するために、ここではこれら土坑について、前方部南北2トレンチの土層堆積状況（第18図）で確認した後世の造成とともに報告する。

前方部南北2トレンチの西壁（A-A'）の土層堆積状況では、地山（38～40層）および地山風化土（32層）を掘り込んで土坑が形成され（土坑SK005～SK008），それぞれの土坑には埋土（15～19層）が確認できる。その上には表土（1層）と造成土（3～9層）が堆積する。造成土の一部（5・7～9層）は土坑内部を掘り込むようにして堆積しており、土坑が形成された後の造成によって土坑上面の一部が削平されている可能性が高い。その上に堆積する造成土（4・6層）は固く締まり、造成に伴う整地面である。そのため整地面の上に存在する3層は、その後の造成に伴う造成土であると考えられる。よって、土坑の形成後には少なくとも2回の造成が行われたと考えられる。

東側（B-B'）の土層堆積状況は概ね西壁と同じであり、造成土（4・6・9～14層）の下には地山（38～40層）および地山風化土（33・34層）が存在し、土坑が形成されている様子が分かる（土坑SK006・SK009）。なお、13層には現代のビニール袋が一部で含まれることを確認しており、土坑形成後の2回の造成は現代のものであった可能性が高い。土坑SK006およびSK009の内部では、埋土が確認できずに造成土のみが堆積していた状況であり、西壁の状況と同じく、墓地の形成後に造成がなされたことを示している。

次に前方部の各トレンチで確認した土坑について検討する。土坑の平面形について、土坑SK001

およびSK002は円形、その他は方形である。土坑の上面は後世の造成で削平されていたため正確には不明であるが、法量は長軸と短軸ともに0.8～1.1mに収まる。深さは概ね0.6～1.3m程度であったと思われる。埋土が残る土坑を含めて内部に遺物は確認されなかったが、特徴から座位埋葬に伴う桶形木棺や立方体箱式木棺などを埋納した近世以降の墓坑であったと考えられる（江戸遺跡研究会編2001）。

地山および地山風化土の削り出しによる古墳の築造で前方部付近は平坦に加工されたとみられ、それが墓地として利用され、近世以降の墓坑が複数形成されたと考えられる。墓坑が集中する地点の北端には溝SD001が存在し、墓坑は溝SD001よりも北側には広がらない。よって、この溝は墓地を区画する役割を担う、あるいは各墓坑の排水用に設けられた可能性が考えられる。

註

- (1) 盛土の水洗篩別の結果については、第5章第1節にて詳しく報告する。
- (2) ここでの堆積土は、丘陵上からの流土のほか、埴丘盛土の崩落土および墓地や墓道などの造成に伴う後世の掘削土などを含めており、これらを二次的な堆積層として捉えている。
- (3) 碑群および砾敷の石材については、中村唯史氏から指導を受けた。
- (4) 地元の方々によれば、前方部側のほか後円部付近にも後世の墓地があったようであり、墓道が丘陵北側から後円部、そして前方部の南側へと続いている痕跡も確認できることから、後円部上も後世の墓地や墓道の造成によって攪乱を受けていたと考えられる。
- (5) 地山である布志名層の特質や土質の違いについては、中村唯史氏からご教示を得た。
- (6) なお、堆積土の20層に含まれていた炭化物のAMS年代測定を行ったところ、現代の年代値を示した。
- (7) 2017年度試掘確認調査でも明確な埴丘面や埴丘端部は認められていない（宮本編2019）。
- (8) 壱丘端部付近の堆積土と地山風化土は色調や風合いが類似しており、土層中の砂粒の含有状態や土質の締まり状態などから総合的に両者の弁別をしたうえで、地山風化土上の傾斜変換点をもとに埴丘端部を確認した。
- (9) 後円部東西5トレンチでは、一部が露出した状態で薄く堆積する盛土を確認した。これは後世の墓地や墓道などに伴う造成によって埴丘面の一部が削平されて他の場所よりも薄い状態となり、本来はもう少し盛土が厚く堆積していた可能性があるが、ここでは現状の状態を埴丘面として認識した。
- (10) 堆積土の12層下面で確認した炭化物についてAMS年代測定を行い、現代の年代値を得た。そのため、5～12層の堆積土は現代の造成に伴う掘削土として堆積した可能性がある。

参考文献

- 江戸遺跡研究会編 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
 脇中光輔編 2019『京田遺跡4区』出雲市の文化財報告39 一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会
 守岡正司編 2017『の子谷横穴墓群 京田遺跡3区』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会

第4表 土層観察表（2019年度発掘調査）

墓坑ST001～ST003・排水溝および後円部東西7トレンチ（第14回）

編 番 号	層 名	性 質	しまり	備 考	編 番 号	層 名	性 質	しまり	備 考
1	黄褐色土	表土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまれに含む	15	黄褐色土	堆積土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
2	オーリーブ褐色土	堆積土	しまり固い	1cm以上の塊をまばらに含む	16	浅褐色土	堆積土	しまり固い	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
3	黄褐色土	堆積土	しまり固い	1cm以上の塊をまれに含む	17	灰褐色土	堆積土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
4	にじみ・黄褐色土	盛土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	18	浅褐色土	堆積土	かたくしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
5	灰白色土	盛土	しまる	2～10mmの大砂利をまれに含む	19	灰褐色土	堆積土	かたくしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
6	黄褐色土	盛土	しまり固い	5～20mmの大砂利をまれに含む 塊大さく(10～20mm)の砂利	20	黒褐色土	堆積土	しまりなし	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む (MBSは代表深度で削りの半程度)
7	黄褐色土	盛土	ややしまる	1～3cmの大砂利をまれに含む	21	にじみ・黄褐色土	堆積土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
8	にじみ・黄褐色土	盛土	ややしまる	1cmの大砂利ブロックをまれに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	22	黄褐色土	堆積土	ややしまる	2～5mmの砂利をまばらに含む 0.5～1mmの大砂利をまれに含む
9	黄褐色土 (MBSは削り)	堆積土	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む	23	にじみ・褐色土	土質CK002 堆土	せりかわし	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
10	褐色土	盛土	ややしまる	1cmの大砂利ブロックをまれに含む	24	褐色土 (にじみ・褐色土 削り)	土質CK004 堆土	しまりなし 含む	1～3cmの大砂利をまばらに含む 0.5～1mmの大砂利を多く含む
11	にじみ・黄褐色土	盛土	かたくしまる	1～3cmの大砂利をまれに含む	25	にじみ・褐色土	土質CK004 堆土	しまりなし 含む	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
12	黄褐色土	盛土	しまり固い	1cmの大砂利をまれに含む 0.5～1cmの大砂利をまばらに含む	26	灰白色土	盛土	ややしまる	3～10mmの大砂利をまれに含む
13	褐色土	盛土	しまり固い	10～20mmの大砂利をまれに含む 塊大さく(10～20mm)の砂利	27	灰白色土	盛土	ややしまる	4～10mmの大砂利を多く含む (MBSは削り附近に多い)
14	明褐色土	盛土	しまる	1cmの大砂利ブロックをまれに含む	28	明褐色土	盛土	かたくしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
15	黄褐色土	盛土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	29	褐色土	盛土	かたくしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
16	にじみ・黄褐色土 (削り)	ST003水溝 堆土	しまる	1cmの大砂利ブロックをまれに含む	30	黄褐色土	盛土	しまる	1～3cmの大砂利をまれに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
17	黄褐色土	ST003水溝 堆土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	31	黄褐色土 (削り) (削り)	ST003水溝 堆土	ややしまる	1～3cmの大砂利をまばらに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
18	にじみ・黄褐色土	地山礫化土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	32	明褐色土	地山礫化土	ややしまる	
19	黄褐色土	地山礫化土	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む	33	黄褐色土	地山礫化土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
20	明褐色土	地山礫化土	しまる	1cmの大砂利ブロックをまれに含む 0.5～1cmの大砂利をまばらに含む	34	明褐色土	地山礫化土	しまる	3～5mmの大砂利ブロックを まばらに含む
21	高砂色土	地山礫化土	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む (削り)に含む	35	黄褐色土	地山礫化土	ややしまる	1～3cmの大砂利をまれに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
22	明褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む (削り)に含む	36	明褐色土	地山礫化土	ややしまる	1～3cmの大砂利をまれに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
1	オーリーブ褐色土 (削り)	堆積土 (2017.3m)	しまり固い	1～3cmの大砂利ブロック・地山 ブロックが複数してまばらに含む 埋設の末の土の塊を含む	37	黄褐色土	地山礫化土	しまる	1～3cmの大砂利をまれに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
2	明褐色土	堆積土 (2017.3m)	しまりなし	0.5～1cmの大砂利をまばらに含む	38	明褐色土	地山礫化土	ややしまる	1～3cmの大砂利をまれに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
3	黄褐色土	堆積土 (2017.3m)	しまり固い	1～3cmの大砂利をまばらに含む	39	黄褐色土	地山礫化土	しまる	1～3cmの大砂利をまばらに含む
4	灰褐色土	堆積土 (2017.3m)	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む	40	にじみ・褐色土	地山礫化土	しまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
5	黄褐色土	盛土	しまり固い	1cmの大砂利ブロックを まばらに含む	41	黄褐色土	地山礫化土	しまる	2～5mmの大砂利をまばらに含む 1～3cmの大砂利をまばらに含む
6	灰褐色土	盛土	しまりなし	10～20mmの大砂利を含む (削り)に削り付けてある	42	明褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1～3cmの大砂利を多く含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
7	明褐色土	造成土	しまる	1～3cmの大砂利をまれに含む	43	黄褐色土	地山礫化土	かたくしまる	2～5mmの大砂利を多く含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
8	オーリーブ褐色土	堆積土	しまり固い		44	にじみ・褐色土	地山礫化土	ややしまる	0.3～0.5mmの大砂利をまばらに含む
9	オーリーブ褐色土	堆積土	しまりなし	本の根を多く含む	45	明褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む 0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
10	褐色土	堆積土	しまり固い	木の根をまばらに含む	46	明褐色土	地山礫化土	しまる	2～5mmの大砂利・地山ブロッ クをまばらに含む
11	オーリーブ褐色土	堆積土	しまる	木の根を多く含む	47	明褐色土	地山礫化土	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む
12	黄褐色土	堆積土	ややしまる		48	明褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む
13	にじみ・黄褐色土	堆積土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む	49	褐色土	地山礫化土	しまる	2～5mmの大砂利を多く含む
14	オーリーブ褐色土	堆積土	ややしまる	木の根を多く含む	50	明褐色土	地山礫化土	かたくしまる	2～5mmの大砂利ブロックが ほとんど入る
15	明褐色土	地山礫化土	ややしまる		51	明褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む
16	にじみ・褐色土	地山礫化土	ややしまる		52	明褐色土	地山礫化土	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む

後円部南北1・2トレンチおよび posterior 南部南北1トレンチ（第17回）

編 番 号	層 名	性 質	しまり	備 考
1	堆積土 (削り)	堆積土 (2017.3m)	しまり固い	1～3cmの大砂利ブロック・地山 ブロックが複数してまばらに含む 埋設の末の土の塊を含む
2	明褐色土	堆積土 (2017.3m)	しまりなし	0.5～1cmの大砂利をまばらに含む
3	黄褐色土	堆積土 (2017.3m)	しまり固い	1～3cmの大砂利をまばらに含む
4	灰褐色土	堆積土 (2017.3m)	しまる	1～3cmの大砂利ブロックを まばらに含む
5	黄褐色土	盛土	しまる	1cmの大砂利ブロックをま ばらに含む
6	灰褐色土	盛土	しまりなし	10～20mmの大砂利を含む (削り)に削り付けてある
7	明褐色土	造成土	しまる	1～3cmの大砂利をまれに含む
8	オーリーブ褐色土	堆積土	しまり固い	
9	オーリーブ褐色土	堆積土	しまりなし	木の根を多く含む
10	褐色土	堆積土	しまり固い	木の根をまばらに含む
11	オーリーブ褐色土	堆積土	しまる	木の根を多く含む
12	黄褐色土	堆積土	ややしまる	
13	にじみ・黄褐色土	堆積土	ややしまる	0.5～1mmの大砂利をまばらに含む
14	オーリーブ褐色土	堆積土	ややしまる	木の根を多く含む

編番号	種名	属性	しまり	編 著
53	明開色土	地山礫化土	ややしまる	1cmの大さの地山ブロックをまれる 多く含む
54	明開色土	地山	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を多 く含む
55	明開色土	地山	かたくしまる	1~2cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
56	明開色土	地山	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を多 く含むに含む
57	明開色土	地山	かたくしまる	0.5~1mmの大さの地山ブロックを まれるに含む
58	明開色土	地山	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を多 く含むに含む
59	明開色土	地山	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利・砂 利を多く含む
60	明開色土	地山	かたくしまる	1~2cmの大さの砂利をまばらに 多く含む

くびれ部2トレーンおよび前方部東西1トレーン・南北2トレーン(第18図)

編番号	種名	属性	しまり	編 著
1	地オリーブ色土	土壌	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
2	オリーブ色土	地盤土	ややしまる	1~2cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
3	黒開色土 (黄開色土 混じり)	造成土	ややしまる	1~2cmの大さの白色砂利を 多く含む
4	明開色土	造成土	かたくしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
5	黄開色土	造成土	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
6	にじい黄開色土	造成土	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利をまばら 多く含む
7	褐色土	造成土	ややりぬけ	1~2cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
8	にじい黄開色土	造成土	しまる	1cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
9	にじい黄開色土	造成土	ややしまる	1~2cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
10	にじい黄開色土	造成土	ややしまる	0.5~1mmの大さの地山ブロック をまれるに含む
11	灰開色土	造成土	ややしまる	1~2cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
12	浅褐色土	造成土	ややしまる	2~3cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
13	にじい黄色土	造成土	しまる	1~2cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
14	にじい黄開色土	造成土	しまりなし	1cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
15	にじい黄開色土	LSK0005 土壌	しまりなし	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
16	明開色土	LSK0007 土壌	しまりなし	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
17	黄開色土	LSK0006 土壌	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
18	明開色土	LSK0008 土壌	ややりぬけ	1~2cmの大さの地山ブロックを まれるに含む
19	黄開色土	LSK0009 土壌	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
20	にじい黄開色土	土壌	ややしまる	1~2cmの大さの地山砂利を まれるに含む
21	浅褐色土	土壌	しまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
22	褐色土	地山礫化土	しまる	1~2cmの大さの地山砂利を多く 含む
23	にじい黄色土	地山礫化土	しまりぬけ	1~2cmの大さの地山砂利を まれるに含む
24	黄開色土	地山礫化土	ややしまる	2~3cmの大さの地山ブロック をまれるに含む
25	にじい黄色土	地山礫化土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
26	明開色土	地山礫化土	しまる	1cmの大さの地山砂利を多く 含む
27	オリーブ色土	地山礫化土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
28	黄開色土	地山礫化土	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む

後部東西1・2トレーン(第19図)

編番号	種名	属性	しまり	編 著
1	明開色土	土壌	しまりなし	面積土を含む 組を多く含む
2	灰開色土	地山	かたくしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
3	灰開色土	地山	しまりなし	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
4	明開色土	地山	しまりぬけ	1~3cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
5	浅開色土	堆積土	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばらに 多く含む
6	灰開色土 (黄開色土 混じり)	堆積土	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を まれるに含む
7	オリーブ色土	堆積土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばらに 多く含む
8	にじい黄色土	堆積土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばらに 多く含む
9	灰褐色土	土壌	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばらに 多く含む
10	明開色土	土壌	ややしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を まれるに含む
11	にじい黄開色土	土壌	ややしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利をま ばらに含む
12	褐色土	土壌	しまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
13	黄開色土	土壌	しまりぬけ	1~2cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
14	明開色土	土壌	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を まれるに含む
15	黄開色土	土壌	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を 多く含む
16	にじい黄開色土	土壌	かたくしまる	0.5~1mmの大さの白色砂利を 多く含む
17	にじい黄開色土	LSK0013 堆積土	しまりぬけ	1cm程度の礫をまばらに含む 組を多く含む
18	明開色土 (灰開色土 混じり)	堆積土	ややしまる	1~3cmの大さの地山砂利を まれるに含む
19	褐色土	LSK0004 堆積土	ややしまる	1cmの大さの地山砂利を まれるに含む
20	にじい黄開色土	LSK0002 堆積土	かたくしまる	1~3cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
21	灰開色土	LSK0001 堆積土	しまりぬけ	1cmの大さの砂利をまばらに 多く含む
22	褐色土	地山礫化土	しまる	0.5~2cmの大さの地山砂利を まれるに含む
23	にじい黄色土	地山礫化土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利を まれるに含む
24	黄開色土	地山礫化土	ややしまる	2~3cmの大さの地山ブロック をまれるに含む
25	にじい黄色土	地山礫化土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
26	明開色土	地山礫化土	しまる	1cmの大さの地山砂利を多く 含む
27	オリーブ色土	地山礫化土	しまりぬけ	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む
28	黄開色土	地山礫化土	ややしまる	0.5~1mmの大さの砂利をまばら 多く含む

第3章 発掘調査の成果

編番号	層名	属性	しまり	備考	編番号	層名	属性	しまり	備考
25	黄褐色土	塊山礫化土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	20	灰白色土	土	中やしまる	0.5～10mmの大粒砂利をまばらに含む
26	黄褐色土	塊山礫化土	かたくしまる	1～5mmの大粒砂利をまばらに含む	21	明黄色土	STDO03細木綿層	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
27	黄褐色土	塊山礫化土	ややしまる	1～5mmの大粒砂利をまばらに含む	22	黄褐色土(下部)	STDO03細木綿層	しまる	1cmの大粒砂利ブロックをまれる。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
28	にじいろ土	塊山礫化土	しまりなし	1cmの大粒砂利をまばらに含む	23	黄褐色土	STDO03細木綿層	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
29	黄褐色土	塊山礫化土	ややしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	24	褐色土	STDO03細木綿層	中やしまる	1cmの大粒砂利ブロックをまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
30	明黄色土	塊山礫化土	しまり弱い	1～3mmの大粒砂利ブロックを2.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	25	明黄色土	STDO03細木綿層	しまる	1cmの大粒砂利ブロックをまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
31	黄褐色土	塊山礫化土	しまり弱い	本の根をわずかに含む	26	黄褐色土	塊山礫化土	かたくしまる	5～10mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む
32	明黄色土	塊山礫化土	ややしまる	3～10mmの大粒砂利をまばらに含む	27	明褐色土	塊山礫化土	中やしまる	3～5mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む
33	明黄色土	塊山礫化土	ややしまる	3～10mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む	28	明黄色土	塊山礫化土	かたくしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
34	黄褐色土	塊山礫化土	しまり弱い	1～3mmの大粒砂利(塊山礫?)を多く含む	29	明黄色土	塊山礫化土	ややしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
35	明黄色土	塊山礫化土	しまりなし	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	30	黄褐色土	塊山礫化土	中やしまる	1cmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
36	黄褐色土	塊山礫化土	しまりなし	1cmの大粒砂利ブロックをまれる。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	31	にじいろ黄褐色土	塊山礫化土	中やしまる	1cmの大粒砂利を多く含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
37	明黄色土	塊山礫化土	ややしまる	1cmの大粒砂利ブロックをまれる。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	32	明黄色土	塊山礫化土	しまる	3～5mmの大粒砂利ブロックを2～3mmの大粒砂利をまばらに含む
38	黄褐色土	塊山礫化土	ややしまる	1～3mmの大粒砂利ブロックをまれる。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	33	黄褐色土	塊山礫化土	しまる	1cmの大粒砂利をまばらに含む。ラテックス凝結物あり。
39	黄褐色土	地山	中やしまる	5～10mmの大粒砂利(塊山礫化土)を多く含む	34	明黄色土	塊山礫化土	しまる	3～5mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む
40	黄褐色土	地山	かたくしまる	糞便がまばら(漂着)に混じる	35	明黄色土	塊山礫化土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
41	明黄色土	地山	しまる	ラテックス凝結物あり	36	黄褐色土	塊山礫化土	しまる	1cmの大粒砂利ブロックをまれる。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
42	褐色土	地山	かたくしまる	1～2mmの大粒砂利を多く含む	37	明黄色土(上部)	塊山礫化土	しまる	1～3mmの大粒砂利を多く含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
38	明黄色土	塊山礫化土	しまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	38	明黄色土	塊山礫化土	しまる	1～3mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む
39	明黄色土	塊山礫化土	しまる	0.5～1mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む	39	明黄色土	塊山礫化土	しまる	1～3mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む
40	黄褐色土	地山	かたくしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	40	黄褐色土	地山	かたくしまる	1～3mmの大粒砂利を多く含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
41	褐色土	地山	かたくしまる	1～3mmの大粒砂利を多く含む	41	褐色土	塊山	かたくしまる	1～3mmの大粒砂利を多く含む
42	明黄色土	地山	かたくしまる	2～5mmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	42	明黄色土	地山	かたくしまる	2～5mmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む

後内部東西3・6トレンチ(第20回)

編番号	層名	属性	しまり	備考	編番号	層名	属性	しまり	備考
1	明黄色土	砂質土	しまりなし	本の根を多く含む	1	明黄色土	砂質土	しまりなし	本の根を含む
2	明黄色土	砂質土	しまりなし	本の根を多く含む	2	黄褐色土	堆積土	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
3	明黄色土	土	しまり弱い	本の根を多く含む	3	黄褐色土	堆積土	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
4	にじいろ土	堆積土	しまり弱い	本の根をまばらに含む	4	オーリーパ糊土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む。本の根を多く含む
5	#リープ糊土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む	5	オーリーパ糊土	堆積土	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
6	黄褐色土	堆積土	ややしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む	6	黄褐色土	堆積土	ややしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
7	黄褐色土	堆積土	ややしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む	7	黄褐色土	堆積土	ややしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
8	黄褐色土	堆積土	中やしまる	2～5mmの大粒砂利をまばらに含む	8	黄褐色土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
9	黄褐色土	堆積土	しまる	1～3mmの大粒砂利ブロックをまばらに含む	9	黄褐色土	堆積土	しまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
10	オーリーパ糊土	堆積土	中やしまる	2～3mmの大粒砂利をまばらに含む。0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	10	オーリーパ糊土	堆積土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
11	明黄色土	堆積土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	11	明黄色土	堆積土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
12	黄褐色土	土	しまる	1～3mmの大粒砂利ブロックを0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	12	黄褐色土	土	しまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
13	にじいろ粘土	土	しまる	1～10mmの大粒砂利をまばらに含む	13	にじいろ粘土	土	しまる	1～10mmの大粒砂利をまばらに含む
14	灰白色土	土	中やしまる	5～10mmの大粒砂利をまばらに含む	14	灰白色土	土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
15	黄褐色土	土	しまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	15	黄褐色土	土	しまる	1～3mmの大粒砂利ブロックを0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
16	黄褐色土	土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利ブロックを0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む	16	黄褐色土	土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
17	黄褐色土	土	しまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む	17	黄褐色土	土	しまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
18	黄褐色土	土	しまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む	18	黄褐色土	土	しまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
19	黄褐色土	土	しまり弱い	5～10mmの大粒砂利をまばらに含む	19	黄褐色土	土	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む

後内部東西4・5トレンチ(第21回)

編番号	層名	属性	しまり	備考
1	明黄色土	土	しまりなし	本の根を含む
2	黄褐色土	堆積土	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
3	黄褐色土	堆積土	しまり弱い	本の根を含む
4	#オーリーパ糊土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む。本の根を多く含む
5	#オーリーパ糊土	堆積土	しまり弱い	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
6	黄褐色土	堆積土	しまり弱い	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
7	黄褐色土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
8	黄褐色土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
9	黄褐色土	土	中やしまる	5～10mmの大粒砂利をまばらに含む
10	黄褐色土	土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
11	明黄色土(0.5m以下)	堆積土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む
12	明黄色土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
13	明黄色土	堆積土	中やしまる	1～3mmの大粒砂利をまばらに含む
14	明黄色土	土	中やしまる	0.5～1mmの大粒砂利をまばらに含む

層番号	層名	属性	しまり	備考
15	明治褐色土	地山礫化土	しまる	1cmの大粒の地山礫をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
16	にじい褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~2cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
17	新潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~5cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
18	明潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~2cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
19	浅黄褐色土	地山礫化土	しまり弱い	1~3cmの大粒の砂利をまぶらに含む
20	明潟褐色土	地山礫化土	しまる	1cmの大粒の地山礫をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
21	明潟褐色土	地山礫化土	しまる	1cmの大粒の地山礫をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
22	褐色土	地山礫化土	しまる	1~3cmの大粒の地山礫をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
23	褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~3cmの大粒の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
24	新潟褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
25	新潟褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
26	明潟褐色土	地山礫化土	しまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
27	にじい褐色土	地山礫化土	しまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
28	新潟褐色土	地山礫化土	こまろ	1cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
29	浅黄褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~3cmの大粒の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
30	明潟褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
31	明潟褐色土	地山礫化土	しまる	10~30cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
32	新潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~2cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
33	新潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
34	明潟褐色土	地山礫化土	しまる	1cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
35	新潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~2cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
36	新潟褐色土	地山	かたくしまる	5~10cmの大粒の地山の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
37	褐色土	地山	かたくしまる	1~5cmの大粒の地山の砂利を多く含む
38	明潟褐色土	地山	かたくしまる	5cmの大粒の地山をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
39	褐色土	地山	しまる	2~5cmの大粒の地山の砂利を多く含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
40	新潟褐色土	地山	しまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む

くびれ部2トレンチ(第23回)

層番号	層名	属性	しまり	備考
1	新潟褐色土	埋植土 (2010-2m)	中やしまる	
2	新潟褐色土	礫土	しまり弱い	
3	新潟褐色土	表土	しまり弱い	木の根を多く含む
4	新潟褐色土	礫土	ややしまる	1~3cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
5	オーリーブ褐色土	礫土	しまり弱い	1cmの大粒の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまれに含む
6	にじい褐色土	礫土	ややしまる	1~3cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
7	新潟褐色土	礫土	中やしまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
8	にじい褐色土	礫土	中やしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
9	新潟褐色土	地山礫化土	しまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
10	新潟褐色土 (埋植土を 覆う)	地山礫化土	しまる	5~10cmの大粒の地山を多く含む
11	明潟褐色土	地山礫化土	中やしまる	1cmの大粒の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
12	新潟褐色土	地山礫化土	中やしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
13	新潟褐色土	地山	中やしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
14	新潟褐色土	地山	かたくしまる	1cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む

くびれ部1トレンチおよび前方東西2トレンチ(東壁)(第22回)

前方部南北2トレンチ(第24回)

層番号	層名	属性	しまり	備考
1	新潟褐色土	表土	ややしまる	木の根を多く含む
2	オーリーブ褐色土	埋植土	しまり弱い	1~3cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
3	新潟褐色土	埋植土	ややしまる	1~3cmの大粒の地山のブロックをまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
4	にじい褐色土	埋植土	ややしまる	0.5~1cmの大粒の砂利をまれに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
5	新潟褐色土	埋植土	じりじり弱い	1cmの大粒の地山を多く含む
6	にじい褐色土	地山礫化土	しまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
7	にじい褐色土	地山礫化土	しまる	0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
8	明潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
9	新潟褐色土	地山礫化土	しまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
10	にじい褐色土	地山礫化土	しまる	0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
11	新潟褐色土	地山礫化土	ややしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
12	新潟褐色土	地山	中やしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
13	新潟褐色土	地山	中やしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む
14	新潟褐色土	地山	中やしまる	1~3cmの大粒の地山の砂利をまぶらに含む 0.5~1cmの大粒の砂利をまぶらに含む

編番号	種名	属性	しまり	備考
12	オーリーフ色土	堆積土	ややしまる	1m以上の砂利をまばらに含む をまれに含む
13	オーリーフ色土	堆積土	ややしまる	1m以上の砂利をまばらに含む をまれに含む
14	明沢和田土	堆積土	しまる	3m以上の山礫をまれに含む をまれに含む
15	明沢和田土	堆積土	ややしまる	0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
16	黄褐色土	地山礫化土	ややしまる	3～5mの大砂利をまれに 含む
17	黄褐色土	地山礫化土	かたくしまる	0.5～1mの大砂利をまばらに 含まれて含む
18	明沢和田土	地山	かたくしまる	0.5～1mの大砂利をまばらに 含まれて含む

前方部東西1・2トレンチおよび前方部南北1-2トレンチ(第25回)

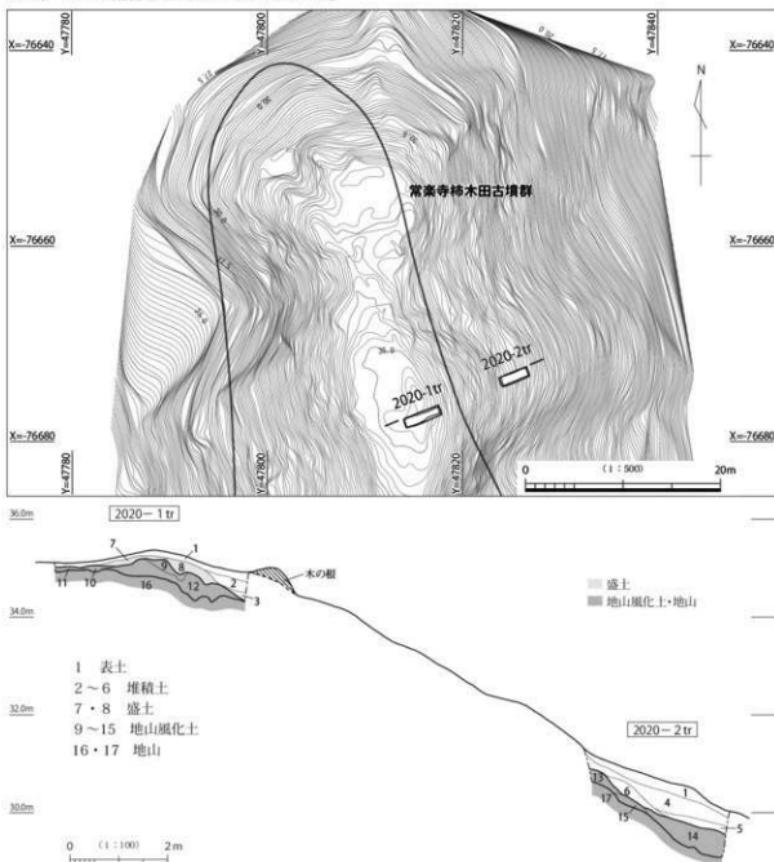
編番号	種名	属性	しまり	備考
1	明沢和田土	堆積土	しまりなし	
2	黄褐色土	堆積土	しまりなし	
3	黒褐色土	堆積土	しまりなし	木や根を多く含む
4	黄褐色土	表土	ややしまる	木の根を多く含む
5	明沢和田土	堆積土	じりり固く	1～2mの大砂利をまれに含む 木の根を多く含む
6	明沢和田土	堆積土	ややしまる	1～2mの大砂利をまれに 含む
7	にじみ色土	堆積土	しまり固く	0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
8	明沢和田土	堆積土	ややしまる	3mの大砂利をまれに含む
9	明沢和田土	堆積土	ややしまる	1～2mの大砂利をまれに含む 0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
10	明沢和田土	堆積土	しまり固く	1～2mの大砂利をまれに含む
11	にじみ色土	堆積土	ややしまる	3mの大砂利をまれに含む 0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
12	明沢和田土	堆積土	しまる	0.5～1mの大砂利をまばらに含む 含まれて含む 下部に炭化物を含む(OAMS年 代測定で約1万年前)
13	黄褐色土	堆積土	ややしまる	0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
14	オーリーフ色土	堆積土	ややしまる	1～2mの大砂利をまれに含む 木の根を多く含む
15	にじみ色土	堆積土	しまり固く	0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
16	にじみ色土	堆積土	しまり固く	1mの大砂利をまれに含む 木の根を多く含む
17	黄褐色土	地山礫化土	ややしまる	0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
18	明沢和田土	地山礫化土	ややしまる	1～2mの大砂利をまばらに 含まれて含む
19	明沢和田土	地山礫化土	かたくしまる	1～2mの大砂利をまばらに 含まれて含む 0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
20	黄褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1～2mの大砂利をまばらに 含まれて含む 0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
21	明沢和田土	地山礫化土	しまる	3～5mの大砂利をまれに含む 1mの大砂利アロックをまれに 含む
22	黄褐色土	地山礫化土	しまる	1mの大砂利をまれに含む 0.5～1mの大砂利アロックをまれに 含む
23	黄褐色土	地山礫化土	しまり固く	0.5～1mの大砂利を多く含 む
24	明沢和田土	地山礫化土	ややしまる	1mの大砂利アロックをまれに 含む
25	明沢和田土	地山礫化土	ややしまる	3～5mの大砂利アロックを まれに含む
26	黄褐色土	地山礫化土	かたくしまる	1～3mの大砂利を多く含 む 0.5～1mの大砂利をま ばらに含む
27	明沢和田土	地山礫化土	ややしまる	0.5～1mの大砂利アロックを まれに含む
28	明沢和田土	地山礫化土	しまり固く	0.5～1mの大砂利アロックを まれに含む
29	明沢和田土	地山礫化土	ややしまる	1mの大砂利アロックをまれに 含む
30	黄褐色土	地山礫化土	ややしまる	0.5～1mの大砂利アロックを まれに含む

前方部東西3・2トレンチ(第26回)

編番号	種名	属性	しまり	備考
31	真周色土	地山礫化土	しまり固く	0.5～1mの大砂利アロックを まれに含む
32	真周色土	地山	かたくしまる	0.5～1mの大砂利をまばらに 含む
33	明沢和田土	地山	しまり固く	1～3mの大砂利をまれに含む 1mの大砂利アロックをまばらに 含む

第3節 2020年度試掘確認調査の成果

常楽寺柿木田1号墳が築かれた位置から北側に向かった丘陵東側斜面に国土交通省が管理道を設置する計画を進めており、その一部が常楽寺柿木田古墳群の包蔵地に該当していた。1998（平成10）年度から1999（平成11）年度において、当時の湖陵町教育委員会の調査では、丘陵北側に一辺約11mの方墳である常楽寺柿木田2号墳の存在が想定されていた。そこで、古墳や関連遺構の有無などを確認するために2020（令和2）年度に2箇所のトレンチを設けて試掘確認調査を行った。調査の結果、古墳の存在やその関連遺構などは見つからなかったが、丘陵東側の土層堆積状況を確認したので、ここで報告する（第27図、図版28）。



第27図 1・2トレンチ位置（上）と土層断面図（下）（2020年度試掘確認調査）

1トレンチは、丘陵の尾根付近から斜面に位置しており、表土（1層）下は堆積土（2・3層）と盛土（7・8層）が確認された。地山（16層）および地山風化土（9～12層）は盛土下に確認されているが、地山風化土（10・11層）の上面はやや低くなっている。削平を受けて平坦に整形されている。その掘削土を地山風化土（9・12層）上に盛土して土手状に整えたように見受けられる。この土手状盛土の構築時期は不明であるが、丘陵上に後世の墓地に伴う墓道が築かれていたことを踏まえると、その墓道の端部に盛られた土手である可能性が考えられ、その場合には比較的新しい時期の盛土であると推測される。

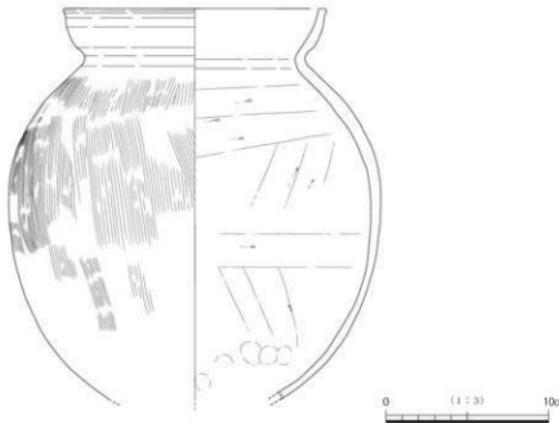
2トレンチでは、明確な遺構や人為的な盛土などの痕跡は確認できなかった。表土（1層）下には堆積土（4～6層）があり、地山（17層）および地山風化土（13～15層）はその下で確認されている。

第4節 出土遺物

今回の常楽寺柿木田1号墳の発掘調査で確認した遺物は総じて少なく破片が多いが、2010（平成22）年度に鳥根県教育委員会が実施した試掘確認調査から出土した土師器は残存状況が良好であり、古墳の建造年代やその評価を考えるうえで重要な要素になってくる。そのため、今回の発掘調査の出土遺物とあわせて検討して報告する。なお、土師器や須恵器の年代的な位置づけについては、これまでの土器編年研究の成果を参考に記述する。

1 2010年度試掘確認調査の出土遺物（第28図、図版29・30）

第28図は2010度試掘確認調査の1トレンチのくびれ部付近から出土した土師器の甕で、残存状態が良好で完形に復元できる個体である。複合口縁の段部の退化が進行した口縁部で、器壁は厚く口縁端部はわずかに外反し、上面は平坦に仕上げられている。胴部の形態は橢円形に近く、底部は丸底

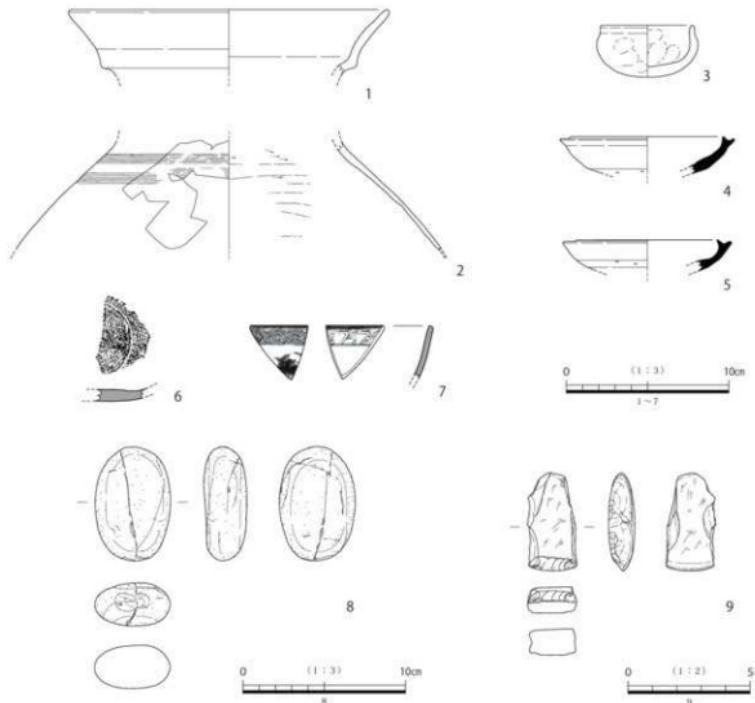


第28図 土師器実測図（2010年度試掘確認調査）

になると想定される。胴部外面は上半部から下半部にかけてタテハケが施される。胴部内面は上半部から下半部にヘラケズリ、下半部から底部付近には指頭押圧の痕跡が残る。土器の胎土や色調については、九景川遺跡⁽¹⁾出土土器の胎土・色調分析の成果（池淵 2008）を参照すると、小谷式的な胎土の様相を示している。小谷式の特徴である複合口縁が退化しているため新しい傾向にあるが、口縁端部の上面が平坦に整えられるなど古い要素も残す⁽²⁾。古墳時代の前期末から中期初頭頃にあたる小谷4式から大東式の古段階までの時期（松山編年Ⅱ期古段階）（松山 2000）で捉えることができると考えられる。

2 2019年度発掘調査の出土遺物（第29図、図版29・30）

第29図1・2は弥生土器の甕である。前方部東西1トレンチの堆積土から出土した。1は口縁部片であり、表面の摩滅が激しく不明瞭な部分が多いが、内外面はヨコナデで仕上げられたとみられる。ここでは甕としたが壺の可能性もある。器壁は比較的薄い。2は胴部の上半部で、器面調整は外面に2条のヨコハケが確認できる。内面はヘラケズリが施され、器壁がかなり薄手に仕上げられる。外面



第29図 遺物実測図（2019年度発掘調査）

には一部に煤が付着する。これらは弥生時代後期末頃の草田5期に比定できる。

第29図3は土師器の手捏ね土器（ミニチュア土器）である。前方部南北1-1トレンチの埴丘面から出土した。口縁部がわずかに屈曲して立ち上がる。色調は大東式に多い橙色系（池澤2008）であるが、胎土は第28図と類似しており、小谷式的な様相となっている。単独で時期を判断することは困難であるものの、埴丘面から出土しており、第28図と同時期頃の所産と推測される。

第29図4・5は須恵器の坏身である。いずれも口縁部片であり、くびれ部2トレンチの攪乱土からの出土である。器高が低く、かなり底が浅い。口縁部の立ち上がりがみられるが、短小化して退化傾向にある。底部外面には回転ヘラケズリが施される。時期は古墳時代終末期の出雲6a期頃と考えられる。

第29図6・7は近世・近代の陶磁器である。6は前方部東西3トレンチの堆積土、7は前方部東西2トレンチの堆積土から出土した。6は陶器の碗または皿の底部片であるが、被熱して釉薬が融解している。底部内面には指頭押圧の痕跡が残る。7は磁器碗の口縁部片である。口縁端部は緑紅がみられ、内外面は型紙擠りによって文様が施される。

第29図8・9は石器である。8は石の節理が縦方向に確認でき、節理上に点刻が施される。後円部北側の繩敷SS001の一部に転用されていた。自然作用を利用した縄文時代後期以降の人為的な石製品の可能性があり、京田遺跡など周辺の縄文時代遺跡に類例がある。下端にわずかに敲打痕が確認できる。石材はデイサイト質の凝灰岩であり、黒色で光沢を帯びる。9は後円部東西1トレンチの盛土からの出土で、水洗篩別によって確認された。小型の扁平片刃石斧であると考えられる。刃部を作出するほか、左右の側面は打ち欠いた状態のままであるため、本来はもう少し大きいサイズであった石斧を再加工したものかもしれない。弥生時代の所産と考えられるが基部が細く、縄文時代の石斧の要素が残る。石材は頁岩である。

註

- 九景川遺跡は出雲市東神西町に所在する古墳時代中期前半頃を中心とした集落跡で、発掘調査によって住跡や掘立柱建物跡などの遺構や多量の土器などが確認されたほか、水辺における土器祭祀の様相が検討できる遺構が見つかっている（池澤編2008）。
- 古墳時代前期の出雲地方に展開する小谷式は、畿内の布留式土器と相互に影響を及ぼしながら成立したことが指摘されている（松山2000・2002）。小谷式成立以降、布留式系の甕は在地製作の土器組成として安定的に存在しており、弥生時代後期からの複合口縁の形態が徐々に退化する傾向は、布留式系の甕の影響を受けている可能性も考えられ、複合口縁の形態の変容要因に関しては、詳細な検討が今後必要になってくる。なお、今回報告する土師器の甕も布留式系の影響が示唆されている（宮本編2019）。

参考文献

- 池澤俊一 2008「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 島根県教育委員会 294～313頁
- 池澤俊一編 2008『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 島根県教育委員会

松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会
99～130頁

松山智弘 2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 198～209頁
宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会

第5表 1・2トレンチ土層観察表（2020年度試掘確認調査）

層番号	層名	層性	しまり	備考	層番号	層名	層性	しまり	備考
1	昭和褐色土	表土	しまりない	4cmの幅を多く含む	10	昭和褐色土	地山褐色土	しまる	1～3cmの大白色鉢をまれに含む
2	オリーブ褐色土	埴塗土	しまりない	1mの大削れをまばらに含む	11	黄褐色土	地山褐色土	しまる	1～3cmの大白色鉢をまれに含む
3	褐色土	埴塗土	ややしまる	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む	12	黄褐色土（表面土被り）	地山褐色土	しまる	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む
4	オリーブ褐色土	埴塗土	ややしまる	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む	13	黄褐色土	地山褐色土	しまる	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む
5	黄褐色土	埴塗土	しまりない	1mの大削れをまれに含む	14	昭和褐色土	地山褐色土	ややしまる	1～3cmの大白色鉢をまれに含む
6	黄褐色土	埴塗土	しまりない	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む	15	黄褐色土	地山褐色土	かたくしまる	1～3cmの大白色鉢をまれに含む
7	黄褐色土	埴土	しまる	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む	16	昭和褐色土	地山	かたくしまる	1～3cmの大白色鉢を多く含む
8	以い-黄褐色土	埴土	ややしまる	1mの大削れでロックをまれに含む	17	昭和褐色土	地山	かたくしまる	1～3cmの大白色鉢を多く含む
9	黄褐色土	地山褐色土	しまる	1～3cmの大白色鉢をまばらに含む					

第6表 常楽寺柿木田1号墳出土土器観察表

調査番号	層番号	出土位置	出土状況	種別	形態	法寸（cm）			性 調	表面調査／文様等	地 上	構成	備考
						直径	底径	高さ					
28	- 29	2010-1r （第2001r層）	地山褐色土 上面付近部	上層部	甕	(16.1)	(25.1)	外面：灰青色 内面：黄褐色	内面：タマテハ（斜上手平底下） 内面：ハケナズレ（斜上手平底下）	1～2mm程度の大白色鉢をまれに含む mm程度の白色鉢を少含む 1mm以下の白色鉢を少含む	0.05式～大束式 (古墳時代後半～中期) 自然な形状の白色鉢を多く含む	自然な形状の白色鉢を多く含む	
29	1 30	前古墳東西1号 （第2501r層）	地山土部	甕	(19.6)			内外面：明黄色	内外面：ヨココテ	1～2mm程度の大白色鉢をまれに含む 1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 (古墳時代後半期)	直口式 (古墳時代後半期)	
29	2 30	前古墳東西1号 （第2501r層）	地山土部	甕				内外面：明黄色	内外面：ナギ、ヨココテ 内外面：ハラウズリ	2～5mm程度の白色鉢を多く含む 1mm以下の白色鉢を少含む 1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 (古墳時代後半期)	直口式 (古墳時代後半期)	
29	3 29	前古墳南北1号 1-rr （第2501r層）	地山土部 （第2501r層）	手平ねじ口 （1.5cm×1.5cm× 1.5cm）	手平ねじ口 （1.5cm×1.5cm× 1.5cm）	5.5	1.0	3.2	内面：灰色 内面：灰褐色	内外面：ナギ（手平ねじ底） 内外面：ナギ（右側・斜側を少含む）	2mm以下の白色鉢を少含む 1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 (古墳時代後半～中期の頭)	直口式 (古墳時代後半～中期の頭)
29	4 30	C2442-2rr （第2501r層）	地山部	甕	(9.4)	(7.2)		内面：灰色 内面：白色	内面：斜面ヘラクセツリ 内面：ナギ	2mm以下の白色鉢をわずかに含む 1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 (古墳時代終末)	直口式 (古墳時代終末)	
29	5 30	くびれ部2号 （第2501r層）	地山部	甕	(8.7)			内面：灰色 内面：白色	内面：斜面ヘラクセツリ 内面：ナギ 内面：ナギナギ	1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 (古墳時代終末)	直口式 (古墳時代終末)	
29	6 30	前古墳東西3号 （第2501r層）	地山土部	甕				内面：灰青色 内面：白色	内面：ナギ 内面：ナギナギ	1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 表面熱然して灰質化、 黒褐色が印象	直口式 表面熱然して灰質化、 黒褐色が印象	
29	7 30	前古墳東西2号 （第2501r～3層）	地山土部	甕				内面：透明 内面：白色	内面：透明 内面：白色	1mm以下の白色鉢を少含む 1mm以下の白色鉢を少含む	直口式 表面熱然して灰質化、 黒褐色が印象	直口式 表面熱然して灰質化、 黒褐色が印象	

第7表 常楽寺柿木田1号墳出土石器観察表

調査番号	層番号	出土位置	出土解説	種別	法寸（cm）			石 材	重量（g）	備 考
					長さ	幅	厚さ			
29 8 30	奥門部北側 （第2501r層）	縦土上面 （第2501r層）	（石器）	石器	7.0	4.6	2.6	ディヤモンド質灰岩	1333	縄文時代後半期 石の表面に点状凹凸、下部に斜面あり
29 9 30	奥門部東西1号 （第2501r層）	縦土 （第2501r層）	扁平な石片	石器	4.0	2.0	1.1	白玉	14.0	縄文時代 扁平な石片を再加工か、水洗漂白にて確認

第5節 小結

今回の常楽寺柿木田1号墳の発掘調査では、古墳の墳丘構造を明確に把握するため、墳丘上に設けた各トレンチの土層堆積状況をもとに墳丘端部を確認して墳丘規模や墳丘の構築過程を検討した。また後円部東側で全面的な精査を行った調査区を中心にして、可能な限り墳丘端部ラインの復元を行った。後円部上においては、土層堆積状況を検討しながら全面的に掘り下げ、主体部の墓坑を確認することができた。ここでは、これまで報告内容を一覧（第8表）にまとめて項目ごとに整理しつつ、内容について検討を加えていくことにする。

1 古墳の墳丘形態と墳丘規模

(1) 墳丘形態

古墳の墳丘形態については、これまでの湖陵町教育委員会や島根県教育委員会による調査成果により、前方後円墳である可能性が指摘されていた（野坂編2000、宮本編2019）。

今回の発掘調査では、前方部での墳丘端部が前方部東西1・2トレンチを中心に確認でき（第25図）、前方部の存在が認められた。さらに前方部南北1-1トレンチからは、墳丘上での葬送儀礼に伴うとみられるミニチュアの手捏ね土器（第29図3）が前方部の墳丘面から出土した。またくびれ部1・2トレンチでは、後円部から前方部にかけての墳丘端部ラインが想定できた（第22・23図）。

こうした発掘調査の成果によって、これまで前方後円墳の要素として示されてきた内容を追認することができ、常楽寺柿木田1号墳が前方後円墳である蓋然性が高まったといえる。

第8表 常楽寺柿木田1号墳調査成果一覧

墳丘形態		前方後円墳（後円部：楕円形／前方部：長方形に近い台形）		
墳丘規模		全長約35m（最大）		
主軸方位		N-7.5°-E		
法量	後円部	後円部径（長径）	後円部径（短径）	後円部高
		22.4m	18.7m	2.7m
	前方部	前方部長（主軸長）	前方部幅／くびれ部幅	前方部高
		12.8m（想定）	13m／11m（想定）	0.9m（想定）
墳丘構築	後円部	地山削り出し＋盛土		
	前方部	地山削り出し		
外表施設	後円部	礫敷（礫敷SS001）／葺石なし／埴輪なし		
	前方部	不明（なし？）		
埋葬関連	後円部	墓坑3基（墓坑ST001～ST003）		
	前方部	不明		
出土遺物		土師器甕（くびれ部周辺）・ミニチュアの手捏ね土器（前方部）		
主体部の墓坑（後円部）	名称	墓坑ST001	墓坑ST002	墓坑ST003
	平面形態	隅丸長方形	隅丸長方形	隅丸長方形
	主軸方位	N-15°-W	N-15°-W	N-15°-W
	法量	南北6.5m×東西2.4m	南北4.7m×東西1.7m	南北3m×東西1.3m
	備考	排水溝（周辺）	排水溝（周辺）	排水溝（内部・周辺）

(2) 墳丘規模（第30図）

後円部については、後円部南北1トレンチと東西7トレンチの土層堆積状況（第16・17図）から、後円部北側の墳丘端部が從来想定されていた位置よりも外側にあることが確認でき、墳丘規模が大きくなる可能性が判明した。後円部の南側の範囲は、後円部南北2トレンチの土層堆積状況（第17図）で確認した区画溝周辺までと考えられる。また、その他の後円部における各トレンチの土層堆積状況や、後円部東側1～3区の精査から墳丘端部の確認やそのラインを復元した。これらの調査成果により後円部は長径22.4m、短径18.7mの楕円形で、高さは2.7mであると確認できた。

前方部は、前方部東西1・2トレンチの土層堆積状況（第25図）から東西の墳丘端部が認められたが、南側は後世の墓地造成などで大幅に削平されており（第17・18・24・26図）、前方部南側の墳丘端部を捉えることができなかった。よって、各トレンチで墳丘端部が確認できた位置をもとに墳丘端部ラインを想定した。前方部東西3トレンチの南側では丘陵自体の東西幅が狭まり、墳丘端部ラインを最大限南側に延ばした場合、丘陵幅が狭小になる手前部分が前方部南側の墳丘裾部であった可能性が考えられる。こうした想定をもとに復元すると、前方部の長さは12.8m程度、裾部の幅は最大で13m程度、高さは最大で0.9mであり、またくびれ部の幅は11m程度であるため、長方形に近い台形であると推定され、後円部に対して前方部の長さが比較的短いという特徴がある。

以上の検討結果から、常楽寺柿木田1号墳は墳丘規模が最大で全長約35mの前方後円墳であったと考えられよう。なお、墳丘主軸の方位は、N-7.5°-Eである。

2 主体部の墓坑

(1) 墓坑の規模と特徴

墓坑の規模（第31図）

後円部上面では表土下に盛土が確認され、後円部上を全体的に被覆している状況を確認した。盛土下に主体部が存在する可能性があったため、精査をしながら盛土を全面的に掘り下げ、地山を確認した。地山上面の精査を進めると、3箇所で地山上面が掘り込まれている状況を確認でき、これらが主体部の墓坑であると考えられた（墓坑ST001～ST003）。これらの墓坑はそれぞれ規模が異なる。

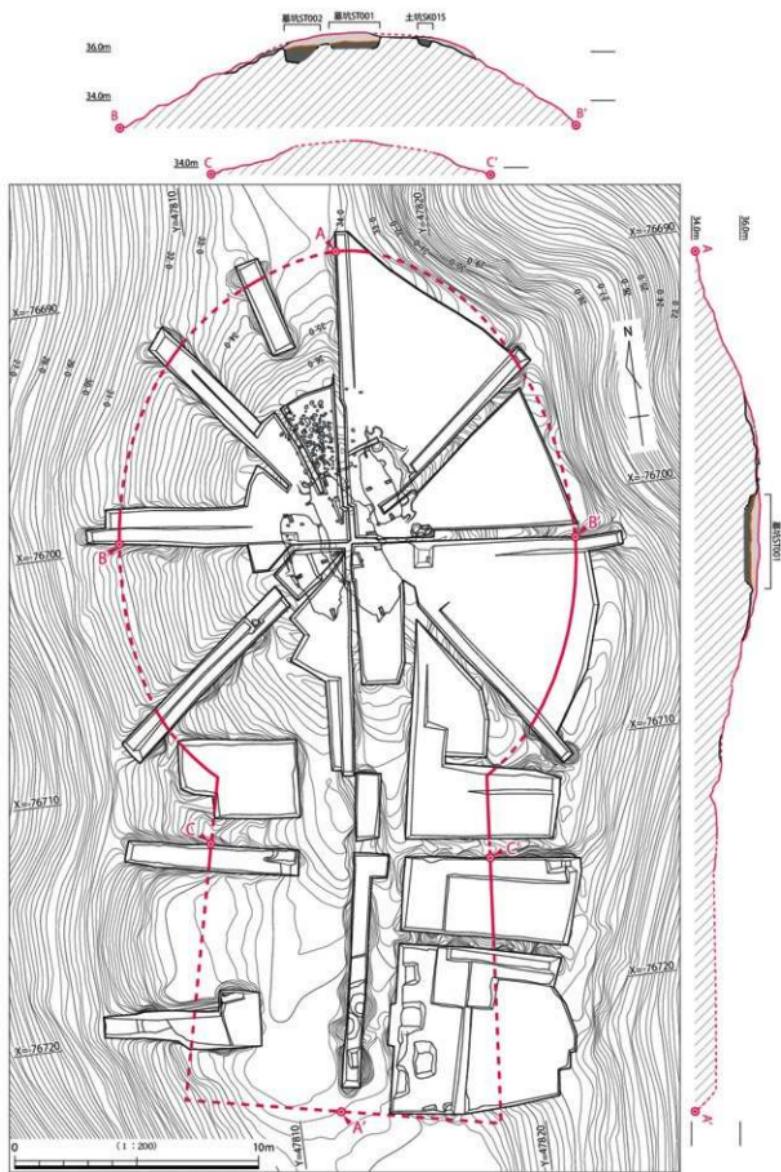
墓坑ST001は後円部の中心および3基の墓坑の中央に位置し、最も規模が大きい。規模は南北6.5m、東西2.4mで平面形は楕円形に近い隅丸長方形であり、主軸方向はN-15°-Wである。

墓坑ST002は墓坑ST001の西側に隣接して形成され、一部が墳丘斜面に位置する。規模は南北4.7m、東西1.7mで、平面形は隅丸長方形である。主軸方向は墓坑ST001と同じくN-15°-Wとなる。

墓坑ST003は墓坑ST001の東側に隣接する。規模は墓坑3基のなかで最も小さく、南北3m、東西1.3mである。平面形は隅丸長方形で、主軸方向は墓坑ST001・ST002と同様にN-15°-Wである。

墓坑の特徴

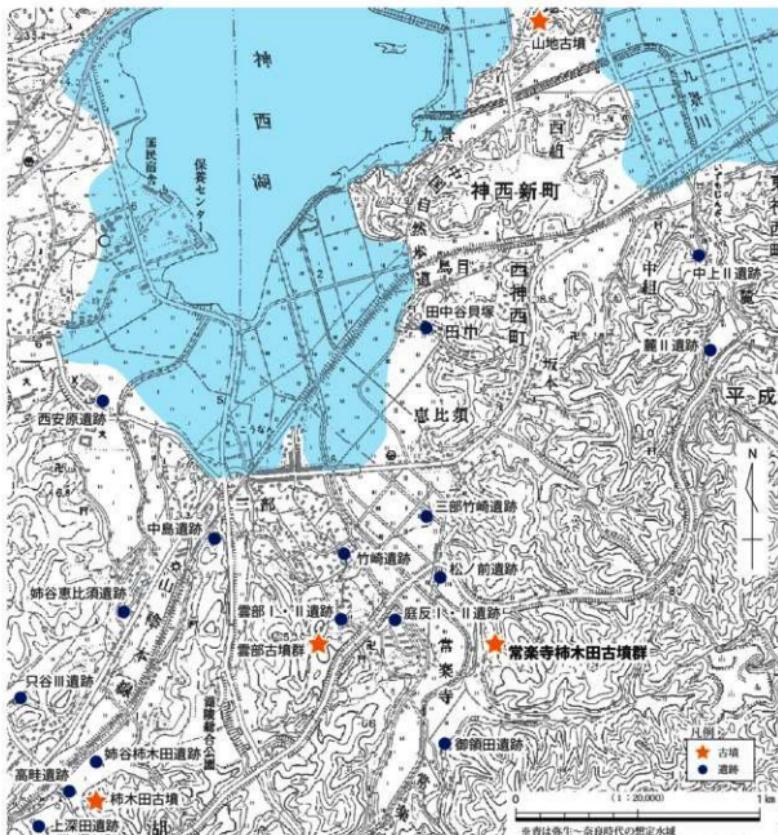
これら3基の墓坑は隣接して存在するが重複関係ではなく、同時期または比較的近い時期に形成された可能性が高い。また主軸方向は北西（N-15°-W）に揃っており、北西の延長上にある水域（奈良時代の『出雲風土記』に記された神門水海）とその周辺の平野部を意識したのかもしれない（第32図）。



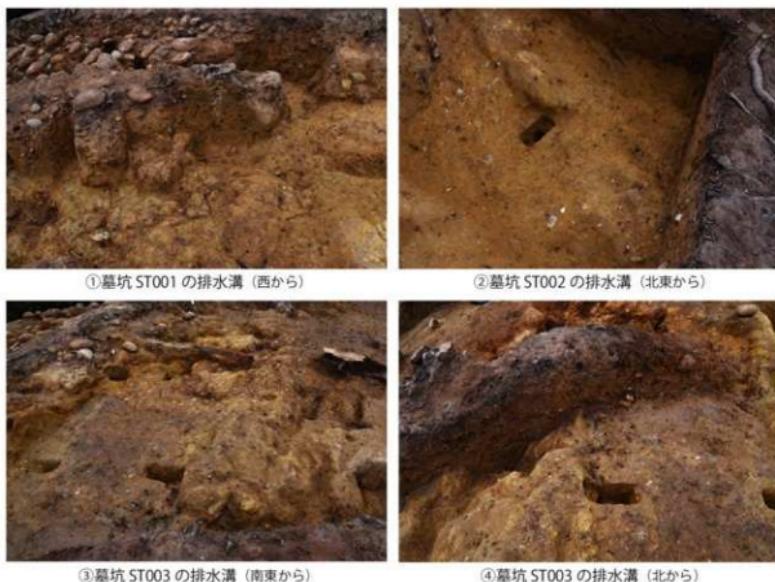
第30図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘規模



第31図 墓坑 ST001～ST003 平面図（左）・オルソ図（中）・赤色立体地図（右）



第32図 常楽寺柿木田1号墳周辺の古墳時代前期・中期の主要遺跡と古墳（群）の位置



第33図 墓坑に伴う排水溝検出状況

なお今回は墓坑内部の詳細な調査は行っていないが、墓坑の南北および東西端部に設けたサブトレンチなどから埋土は複数層あることが確認され、埋土に地山礫や地山ブロックを含んでいるため、地山や地山風化土の掘削土を埋土に用いた可能性が考えられた。

（2）墓坑に伴う排水溝（第33図）

また各墓坑の周辺には排水溝が確認されており、墓坑 ST003 で最も顕著に認められる。墓坑に伴う排水溝は、墓坑の底面付近に設けられて主体部内部の排水を促す役割を担うことが多いが、今回墓坑周辺で確認した墓坑 ST001 と ST002 の排水溝は、主体部周辺の排水を意図したものであると判断した。一方、最も丁寧な造りの墓坑 ST003 の排水溝は、墓坑底面よりも低い位置で墓坑の東側を囲うように設けられ、主体部周辺および内部の排水を意図したと考えられる。

3 外表施設と墳丘盛土

（1）外表施設

古墳の前方部南側と東半分および後円部東側では、古墳の外表施設の有無を確認するために、後円部東側 1～3 区の調査、およびくびれ部 2 トレンチから前方部東西 1 トレンチ、そして南北 1 トレンチの内部の全面的な精査を行ったが、埴輪や葺石などは確認できなかった。

その一方、後円部上の精査を進めるなかで、主体部の墓坑とともに、墓坑 ST001 の北側において墳丘面の盛土上に展開する礫敷 SS001 が見つかった（第35図）。礫敷 SS001 は人頭大の円礫を主体



第34図 碓群検出状況



第35図 碓敷 SS001 検出状況

としてその間に拳大の円礫をまばらに含む。その他の場所では確認できなかったが、礎敷 SS001 上面で表土に混じって確認された後円部北西側の礎群（第34図）は、後世の攪乱を受けて散乱した礎敷 SS001 の一部である可能性が高く、礎敷 SS001 は後円部北西側を中心と現況よりもやや広い範囲で配置されていたと考えられる。

（2）墳丘盛土

墳丘上の盛土は後円部で確認されている。盛土は墓坑全体を覆う盛土と後円部上面の外表を整える盛土の2種類に大きく分けられ、前者を墓坑盛土、後者を外表盛土として認識する。墓坑に埋土を施した後に墓坑盛土で覆い、その後に後円部の形状を精美に整えるために外表盛土を行ったという構築過程が想定される。後円部の各トレンチの土層堆積状況では、乱掘による掘り込み痕跡などは見つかっていないが、盛土のなかに主体部の副葬品や後世の遺物などが混在している場合、主体部が乱掘を受けていた可能性を考慮する必要がある。

後円部の各トレンチの土層堆積状況から、盛土には地山礫や地山ブロックを含むものがあり、地山や地山風化土の掘削土を盛土に用いた可能性を考えられるが、布志名層に由来する地山が場所によってやや異なる様相を示すことが各トレンチの土層堆積状況の検討から判明している。そのため、墓坑盛土と外表盛土の様相が類似する場合、比較的近い場所から採取した可能性を示しており、異なる場合には別々の地点で採取していたとの推定が可能になる。

こうした前提を踏まえて盛土の性格を明確にするため、墓坑周辺の範囲を対象として盛土の水洗篩

別⁽¹⁾を実施し、内容物を土砂と2種類の地山礫に分類して定量的に分析した。詳細は第5章第1節で報告するため、ここではその概要のみを述べるが、定量分析の結果、墓坑盛土と外表盛土で内容物の含有比率にやや差が生じていることが分かった。また、外表盛土は各地点での内容物の含有比率にある程度のばらつきが見られたが、墓坑盛土は地点によらず内容物の含有比率が概ね一定であったことから、両者が使い分けられていたと推測され、また墓坑盛土は墓坑埋土の含有比率と近似しており、墓坑埋土と同じ地点あるいは比較的近い場所で採取された可能性があることを示唆する。

4 墳丘の構築と埋葬・葬送儀礼

墳丘の構築過程については、各トレンチの土層堆積状況で明らかになった内容をもとに復元が可能である。また被葬者の埋葬やそれに伴う葬送儀礼などについても、発掘調査で判明した内容を整理し、墳丘構築のなかで段階ごとに検討する（第9表）。

（1）後円部の構築と埋葬・葬送儀礼

墳丘成形

後円部では丘陵の高まりを利用して、地山および地山風化土の一部を削り出して墳丘の形状に成形している様子が後円部各トレンチの土層堆積状況（第16・17・19～21図）で認められる。

後円部の頂部付近は平坦に成形されており、後円部上に墓坑を形成するために整えられたと考えられる。また、後円部上から一段下がった後円部中段付近の地山および地山風化土上面の墳丘面が比較的平坦に成形された状況が、特に後円部西側における後円部東西2・5・6トレンチの土層堆積状況（第19～21図）で確認できる⁽²⁾。この平坦面には盛土が上面に堆積しており、後世の造成によるものである可能性は低く、墳丘成形時の段階で同時に平坦に成形されたと考えられる。

この平坦面の役割を確実に特定することは難しいが、平坦面の形成状況から推察することは可能である。平坦面は主に後円部西側で認められているが、この周辺には墓坑STO02が墳丘斜面に形成されている状況にあり、そのままの傾斜では上面に施される盛土が墳丘下に流出することが懸念される。よって後円部西側の平坦面上に盛土を行うことで、盛土を安定させて墳丘下に流出するのを防ぐことを意図した可能性がある。古墳が築かれた丘陵頂部は東西幅がそれほど広くなく、古墳の墳丘面と丘陵斜面が近いため、後円部における平坦面の作出は、丘陵上の立地に対応した当時の墳丘造法の一つであったと推察され、墳丘の段階構造を考えるうえで示唆的である。

第9表 常楽寺柿木田1号墳の構築と埋葬・葬送儀礼

	後円部の構築	前方部の構築	備考
第1段階	墳丘成形	墳丘成形	地山削り出して成形
第2段階	墓坑形成	—	墓坑3基の形成は同時期
第3段階	被葬者埋葬	↑	前方部やくびれ部周辺
第4段階	葬送儀礼	葬送儀礼	における葬送儀礼は
第5段階	墳丘盛土		第3～6段階のなかで
第6段階	礫敷構築	↓	行われたと想定可能

墓坑形成

墳丘を成形した後に後円部上の地山および地山風化土を掘り込んで主体部の墓坑が形成される。今回の調査では後円部の墳丘頂部に墓坑が3基確認できた。その中央に最も規模が大きい墓坑ST001が築かれ、それに次ぐ規模の墓坑ST002はその西側で一部が墳丘斜面に位置する。最も規模が小さい墓坑ST003は、墓坑ST001の東側に配置される。なお、後円部東西3・6トレンチの土層堆積状況（第20図）を見ても墓坑同士の重複関係は確認できない。そのため、各墓坑は同時期または比較的近い時期に形成されたと考えられる。

被葬者埋葬

墓坑の掘削後には墓坑内に埋葬施設が造られて被葬者の埋葬が行われたとみられるが、具体的な埋葬施設などについては、墓坑内部の詳細な調査を行っていないため不明である。各墓坑には埋土が充填されており、埋土上面を精査したところ、木棺直葬に認められることが多い陥没痕などは確認できなかったが、後円部南北1・2トレンチの土層堆積状況（第17図）で示されるように、墓坑ST001の中心付近の埋土上面がやや窪んでいる状況を確認した。

葬送儀礼

被葬者の埋葬に伴って何らかの葬送儀礼が行われた可能性があるが、墓坑埋土内部および上面やその周辺からは遺物の出土ではなく、後円部での具体的な葬送儀礼の様相は不明と言わざるを得ない。なお、墳丘の成形時において後円部中段付近に形成された平坦面は、盛土がなされるまでは露出していた蓋然性が高い。よって想像を逞しくすれば、この平坦面は盛土の流出を防ぐ目的のほか、後円部上で行われた埋葬の段階や葬送儀礼における墓道や作業面としての役割を担っていたなど、埋葬や葬送儀礼と何らかの関連性を持っていたのかもしれない。

墳丘盛土

盛土は墓坑上面に堆積しており、墓坑に埋土を充填後に盛土がなされたと考えられる。盛土は墓坑を覆う墓坑盛土と、後円部上面の外表を整える外表盛土の2種類に分けられた。まず墓坑盛土が墓坑内に埋土を施した後に施される。墓坑盛土の上面や墓坑盛土内に古墳時代の遺物は確認できなかったため、墓坑盛土の完了段階での葬送儀礼などは行われていなかったと考えられる。

礫敷構築

礫敷SS001は墓坑ST001の北側の墳丘面で見つかっている。盛土の上面に配置されることから、盛土後に構築されたと考えられる。また、盛土上の表土中には礫敷SS001と同種の石材を持つ礫群が散乱して後円部北西側に展開しており、これらは後世の墓地や墓道の造成などによって礫敷SS001が攪乱を受けて散乱したと考えられる。よって、本来の礫敷SS001が展開する範囲はもう少し広く、後円部北西側に敷かれていた可能性が指摘できる。

（2）前方部の構築と葬送儀礼

墳丘成形

前方部については、前方部南側が後世の墓地造成などによって削平されて不明瞭な部分が多いが、前方部東西1・2トレンチの土層堆積状況（第25図）において、地山および地山風化土を削り出し

て墳丘を成形している様子が確認できた。墳丘面には盛土は確認できなかったことから、前方部は盛土を行わずに地山の削り出しによって形状を成形していたと判断される。また前方部における墳丘の成形は、後円部の墳丘の成形と同時期に行われたと推測される。

なお、前方部東西1・2トレンチの土層堆積状況（第25図）から、前方部の墳丘面は明瞭な平坦面を持たず、東西方向の断面形は緩やかに丸みを帯びることが読み取れる。平坦面が後世の造成などで削平されたことも推測できるが、その場合でも平坦面の幅はかなり狭小であったと思われる。

葬送儀礼

今回の発掘調査では、後円部では明確な葬送儀礼の痕跡は確認できなかったものの、後円部の裾部に近い前方部の墳丘上面では、非日常的な用途が想定されるミニチュアの手捏ね土器（第29図3）が出土している。また2010年（平成22）度の試掘確認調査では、前方部に近いくびれ部周辺で土師器甕（第28図）が確認されており、これらの土器を用いて前方部やくびれ部周辺で葬送儀礼が行われた可能性が高い。この前方部やくびれ部周辺での葬送儀礼は、後円部における被葬者の埋葬に伴うものであるか、または埋葬後のある時期に改めて行われたと考えられる。

5 主体部の被葬者像

墓坑内部の詳細な調査は行っておらず、加えて墓坑埋土上面やその周辺からは遺物が出土しなかったため、被葬者の埋葬に伴って行われた葬送儀礼の詳細な内容は不明である。しかしながら、被葬者像については、今回確認した3基の墓坑の主軸方向が北西（N-15°-W）に揃えられて北西延長上の水域とその周辺の平野部に向かっている点が注目される。3基の墓坑は概ね同じ頃に埋葬されたとみられることから、水上交通の要所である当時の水域の南側とその周辺集落を掌握した首長が埋葬された可能性があり、それに伴って葬送儀礼が行われたことは想像に難くない。

6 古墳の出土遺物と築造時期

古墳からの出土遺物は総じて少なく、また主体部の内部の詳しい調査は行っていないため、古墳の築造時期や埋葬時期などの年代的な位置づけは難しい。現在のところ、2010度試掘確認調査の1トレンチのくびれ部付近から出土した土師器の甕（第28図）が年代的な位置づけを検討するうえで重要なとなる。この土師器は、形態の特徴や胎土の様相の検討から、小谷4式から大東式（松山編年Ⅱ期古段階）（松山2000）の範疇で収まると考えられる。また残存状況が良好で出土地点は前方部付近のくびれ部であるため、くびれ部周辺での葬送儀礼に用いられたと推測される。この場所での葬送儀礼が被葬者の埋葬時期と同時期であるとすれば、古墳の築造時期もこの頃にあたるが、埋葬後に行われた葬送儀礼のなかで使用されたものであれば、その時期以前には古墳が築造されていた可能性が高まる。

今回の発掘調査で確認したミニチュアの手捏ね土器（第29図3）は、単独での時期比定は難しいが、前方部南北1-1トレンチの墳丘面から出土しており、土師器の甕と概ね同時期頃と考えられる⁽³⁾。

よって常楽寺柿木田1号墳の正確な時期比定は難しいが、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造されたと推測でき、前方後円墳集成編年（広瀬1991）では4～5期頃の時期に位置づけられよう。

7 出雲平野周辺における常楽寺柿木田1号墳の位置づけ

ここで出雲平野周辺における前方後円墳の変遷を整理し、常楽寺柿木田1号墳の位置づけを明確にしておきたい（第36図）。

出雲平野で現在のところ最も古い前方後円墳は、宍道湖西岸周辺の丘陵上に築かれた前期後葉頃の大寺1号墳（出雲市東林木町）であり、墳丘規模は全長52mを測る（仁木編2005）。また、常楽寺柿木田1号墳から直線にして約2.5km北上した位置の丘陵上には前期末頃の山地古墳（出雲市神西沖町）が築かれる。径が約24m程度の円墳として報告されているが（川上編1986），古墳が立地する丘陵西南部には平坦面が広がり、前方後円墳であった可能性も完全には否定できない⁽⁴⁾。これらの前期古墳が築造された後、前期末から中期初頭頃に常楽寺柿木田1号墳が出現する。

その後、丘陵上に築かれた中期中葉から後葉頃の北光寺古墳（出雲市東神西町）は全長約64mを誇り、この時期の出雲地方で最大級の前方後円墳となる（仁木編2007）。北光寺古墳に後続する前方後円墳には、全長約49mに復元される中期末頃の神庭岩船山古墳（出雲市斐川町）が挙げられ（田中2016, 内田ほか2018），平地に近い台地上に立地する。

このように見ると、常楽寺柿木田1号墳は、古墳時代前期から中期に出雲地方で最大規模の前方後円墳である北光寺古墳が築かれる前段階に位置づけられ、常楽寺柿木田1号墳の様相の解明は、出雲地方西部で巨大前方後円墳が形成された社会背景を考察するうえで重要な位置を占めると考えられる。

（幡中光輔）



第36図 出雲平野周辺の主な古墳時代前期・中期の前方後円墳の分布

註

- (1) 盛土の一部は現地で篩を実施したが、水洗篩別は出雲弥生の森博物館で行った。なお、水洗篩別については2mmメッシュの篩を用いて実施した。
- (2) 墳丘東側の後円部東西3・4トレンチ内では明瞭には確認できなかったが、地形の細かな高低差を表現した赤色立体地図(図版9・10)では、後円部東側1～3区内で比較的平坦に近い地形が墳丘西側と同様の位置で確認でき、墳丘東側でも地山を成形して一定の平坦面を整えていた可能性がある。
- (3) 常楽寺柿木田古墳群に近接する九景川遺跡(池淵俊2008)や出雲平野の中央部に位置する中野清水遺跡(角田編2006)などの古墳時代前期から中期前半の集落跡においても、ミニチュアの手捏ね土器が比較的まとまって出土している。
- (4) 古墳が立地する丘陵の地形測量原図から前方部が存在すると仮定して想定復元すると、全長が約45m程度の前方後円墳になる可能性が考えられる(第5章第2節)。

参考文献

- 池淵俊一編 2008『九景川遺跡』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会
- 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2018「出雲市斐川町神庭岩船山古墳墳丘測量報告」『島根考古学会誌』第35集 島根考古学会 21～38頁
- 角田徳幸編 2006『中野清水遺跡(3) 白枝本郷遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7 島根県教育委員会
- 川上 稔編 1986『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 田中 大 2016「出雲市神庭岩船山古墳出土の円筒埴輪」『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター 19～24頁
- 仁木 聰編 2005『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書29 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 仁木 晴編 2007『北光寺古墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書36 島根県教育庁文化財課古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 野坂俊之編 2000『湖陵町遺跡地図』湖陵町教育委員会
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社 24～26頁
- 松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 99～130頁
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会

第4章 自然科学分析

常楽寺柿木田1号墳における後円部上の電気探査

1はじめに

常楽寺柿木田1号墳は、出雲市湖陵町常楽寺に所在する前方後円墳である可能性が高い。主体部が残存する可能性のある後円部については、道路の法面工事に係る設計において予め主体部や地山の情報を取り得する必要があった。よって発掘調査に先立って、古墳の主体部の位置や規模などを明らかにすること、地山と堆積層(被覆層)の境界を推定することを目的として、古墳の後円部上で実施した電気探査の成果を報告するとともに、発掘調査で確認した土層堆積状況との比較検討を行った。

2測定方法

(1) 原理

比抵抗2次元探査は地盤の比抵抗を測定し、これより2次元的な比抵抗構造を解析、他の調査データと併せて対象地盤の地質構造及び地下水飽和状況、空洞等を推定する目的で実施するものである。弾性波探査では地盤の速度構造が求められ、土木施工に対して直接反映するような物理量が得られるが、電気探査では直接得られるのは地盤の比抵抗構造である。しかし地盤の種類や含水状態、風化状態によってその比抵抗が異なるので、地質状況、地下水状況、断層構造を推定することは可能であり、これが本作業の目的である。

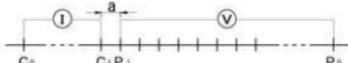
(2) 探査方法

この探査法は、地盤の比抵抗分布を2次元構造として捉え、測線直下の解析対象断面内の見かけ比抵抗分布を計測するものである。

今回実施する方法は2極法であり、第37図のように電極を配置する。

C_0 と P_0 は遠電極として固定し、 C_1 、 P_1 間の距離あるいは位置を変化させて測定する。 C_0 、 C_1 間に電流 I を流し、 P_1 、 P_0 間の電位差 V を測定すると、次式から見かけ比抵抗 ρ_a が求められる。

$$\rho_a = 2 \pi a \cdot V / I$$



第37図 2極法の電極配置

実際の測定では、測線上に電極を一定間隔で設置し、これらの電極をテイクアウトケーブルで測定装置に接続する。測定装置はあらかじめ設定されたプログラムに基づき、電流電極 C_1 と電位電極 P_1 の切り替え測定を実施する。また、これらとは別に測線から十分離れた地点(最大電極間隔の5~10倍程度)に基準となる2本の遠電極 C_0 および P_0 を設置する必要がある。

電位の測定は、まず電流電極 C_1 を固定し、一定間隔ごとの電位変化を電位電極で測定する(P_1 、

P_2, P_3, \dots, P_n)。こうしてある展開の測定が終了すると、電流電極を移動し同様の操作を繰り返す。

電極の設置間隔は、第38図に示すように必要とする探査深度と分解能に応じて決定される。今回は0.5m間隔に設定した。また1カ所の電流電極に対し、電位の測定は0.5mから10mまでの20通りに電極間隔を変化させて実施する。

(3) 2次元解析方法

地表部が平坦で無い場合、測定された電位値には地形の影響が含まれており、解析に際しては、これらを補正する必要がある。この補正を実施するにはFEMによるシミュレーションを実施し、この結果をもとにデータの補正量を決定する。次に補正後の電位値及び電流値を用いて見かけ比抵抗を計算し、この見かけ比抵抗疑似断面を作成する。この断面図は見かけ比抵抗をそのまま用いているため正しい比抵抗分布を表すものではないが、地下構造の概要を表現している。

見かけ比抵抗疑似断面より更に詳細な比抵抗分布を解析するために、2次元解析を適用する。まず、見かけ比抵抗疑似断面から地下構造の初期モデルを作成し、このモデル構造から理論的に計算される見かけ比抵抗値が測定値に最も近くなるように、地下の比抵抗分布を最小二乗法により決定する。第39図に解析フローを示す。

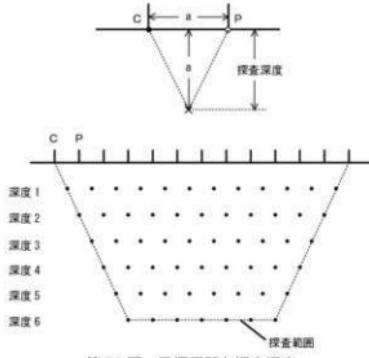
解析結果は比抵抗値により色分けし、比抵抗断面を作成する。

3 測定結果

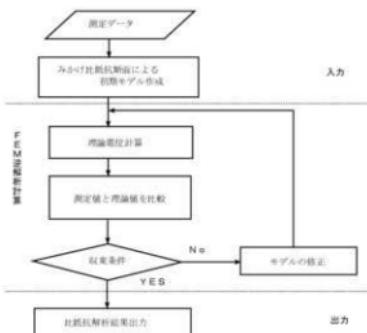
古墳主体部の存在が想定される後円部上を中心に、測線(A~U)を設定し、測線上に測点(電極)を0.5mピッチで配置した(第40図)。第41・42図にて、電気探査の結果から求められた比抵抗断面図を測線毎に示す。

4 地山境界の推定

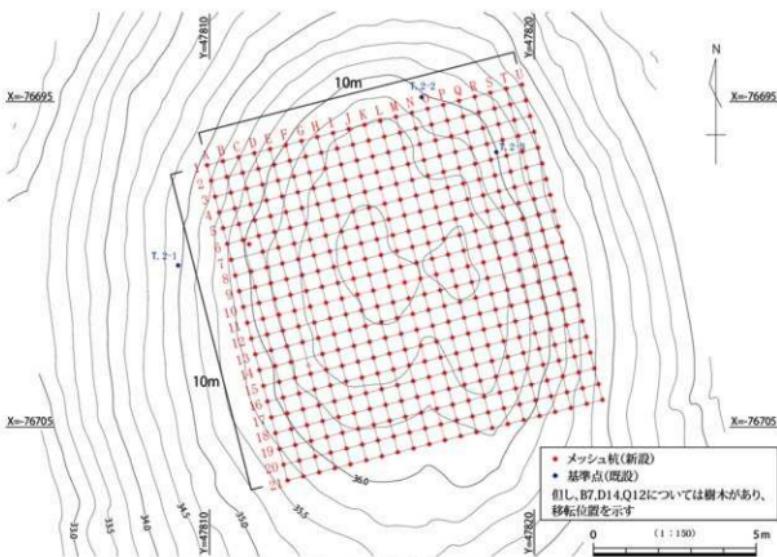
電気探査の結果から、地山より上部の堆積層中に、空洞・構造物と判断される箇所は確認されなかつたが、一方、地山と堆積層の境界は確認できた。



第38図 電極展開と探査深度



第39図 2次元逆解析フロー



第40図 測線の設置図

第43図に、電気探査の結果と地形の関連性を確認するために、コンターマップで表現した後円部の地山の推定出現標高を示す。

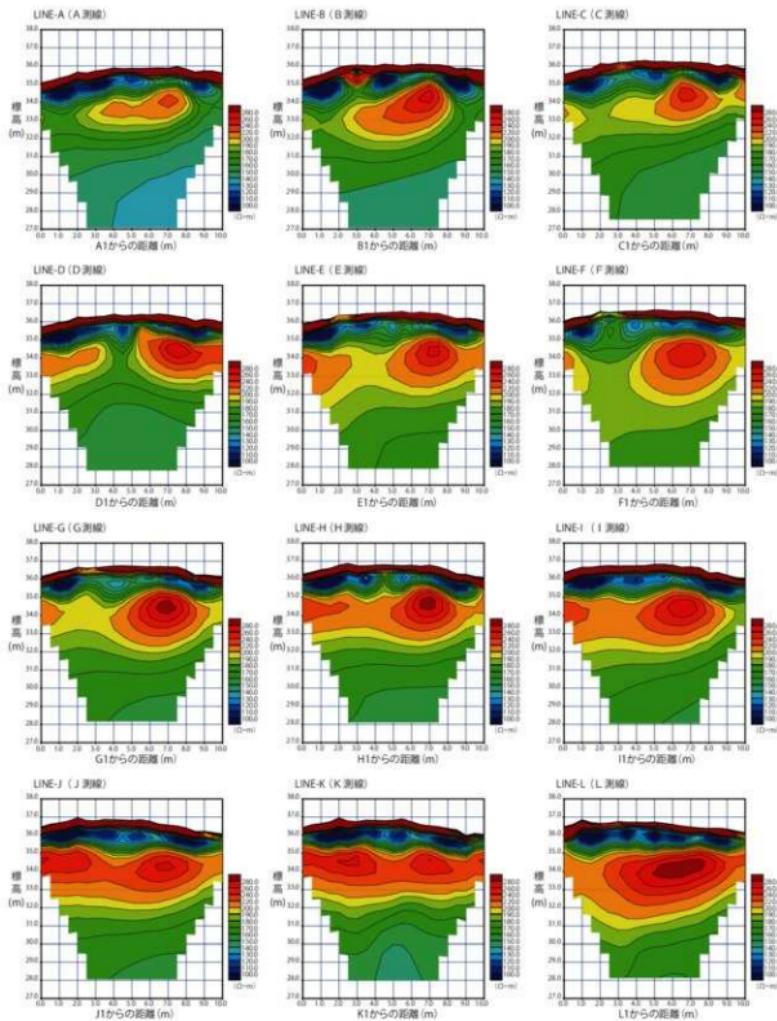
後円部の地山の推定出現標高は、概ね現地形に沿った傾向を示したが、黄色い部分で地山に不自然な長方形の窪みを頂部付近で確認し、これが古墳の主体部に関連する可能性が考えられた。また、図中の緑色窪いでは、周りと比較して標高が低い帯状の窪みが確認された。これは、水の流れなどにより浸食を受けた跡や斜面変動の跡、あるいは人為的な地山の掘削跡である可能性が示唆される。浸食や斜面変動に起因する場合、一般的に標高が高い方から低い方へ連続性が認められるので、緑窪いの部分はそれらの影響を受けたと考えられる。その他橙色窪いは地山の推定出現標高が高いが、発掘調査の結果（第3章第2節）、地山の土質の違いに反応したと考えられる。

5 電気探査結果とトレンチ調査の比較

電気探査の結果で示された比抵抗断面の情報をさらに明確にするため、発掘調査で確認した土層堆積状況との比較検討を行った。第44図に断面位置、第45・46図に比抵抗断面とトレンチ断面を示す。

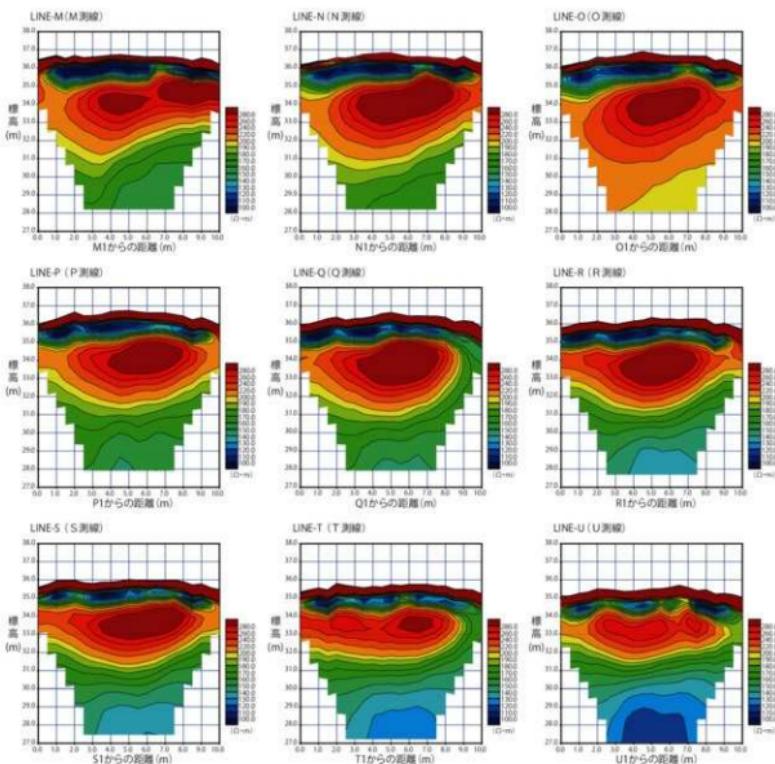
断面A-A'は、墓坑STO01の主軸方向に沿った土層断面図（第3章第16図）に重なる測線Iであり、断面B-B'は、墓坑STO01からSTO03を通る土層断面図（第3章第20図）と同じ位置に設定した。

確認された各墓坑の断面と比抵抗断面を照らし合わせた結果、各墓坑の境が、標高36.0m付近に見られる濃い青色部分と調和的であることが確認できた。このことから、標高36.0mと標高36.2mで比抵抗平面分布図を作成し、第47・48図に示す。



第41図 比抵抗断面図(その1): A～L測線

第47図では、墓坑STO01とSTO02の境付近に比抵抗の小さな領域(寒色)が分布し、墓坑STO01の北東部の境も、比抵抗の小さい領域と調和的である。第48図でも、墓坑STO01の北東部の境は、比抵抗の結果と調和的である。つまり、墓坑内部は周りと比べて、比抵抗値が高いと言える。一般的に、埋土をする、構造物などが地中に存在するなど、周囲と比較して間隙が大きくなることで



第42図 比抵抗断面図(その2): M ~ U測線

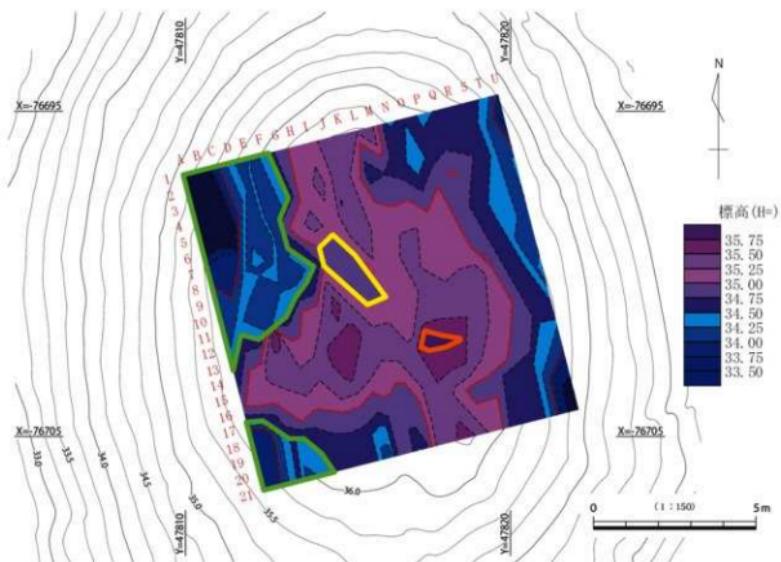
比抵抗値が高くなる。今回の発掘調査では主体部の埋葬施設などが確認されなかったことから、本件での墓坑内の比抵抗値上昇は、埋土により周囲と間隙に差が生じたことに起因するものと考えられる。

6 まとめ

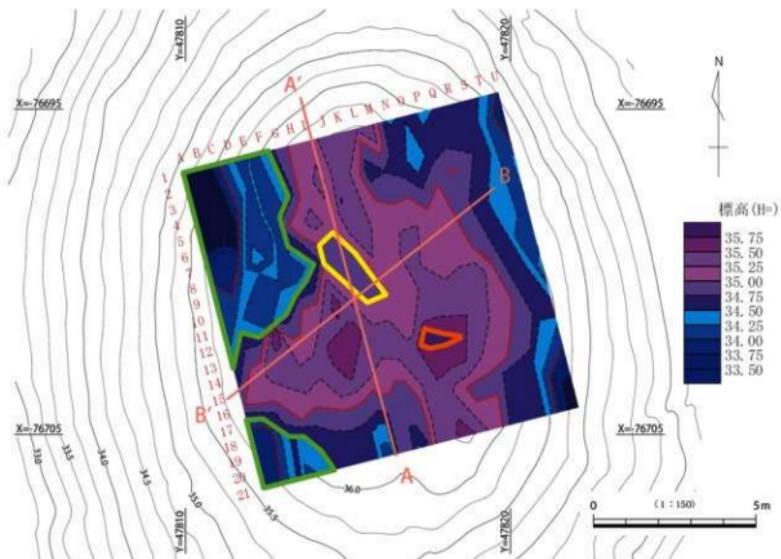
常楽寺柿木田1号墳の電気探査は、古墳の主体部の位置および地山と堆積層の境界の推定を目的として実施した。探査結果を基に各種比抵抗断面図から、推定地山出現標高コンターマップを作成し、地山と堆積層の境界を推察することができた。また、発掘調査の成果と比較検討することで、電気探査が古墳の主体部の位置の推定に有用であることを示した。

電気探査は、ボーリング調査などと併用して地下構造を推定する手法であるが、本件では電気探査のみの調査結果でも、その有用性が確認された。ただ、そのデータの取り扱いには経験と実績が伴うものであり、今後この技術を広く理解してもらうためには、より多くの調査数が求められる。

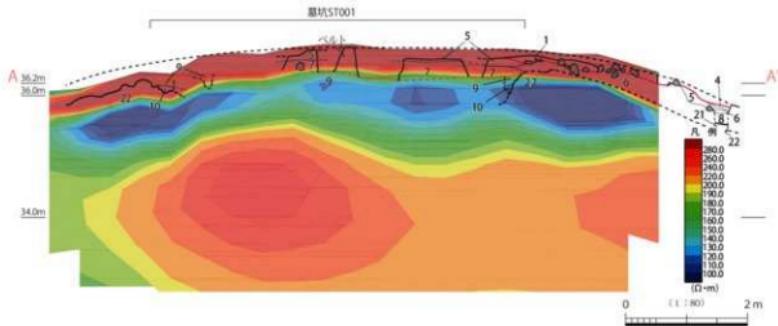
(奥中亮太)



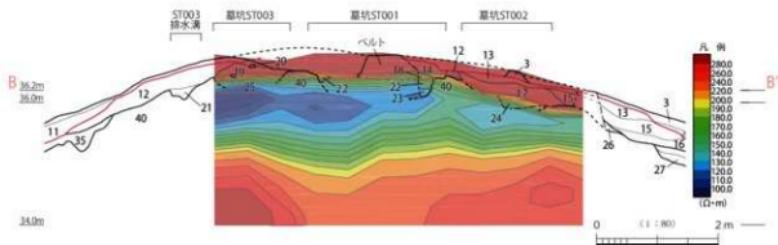
第43図 推定地山出現標高のコンターマップ



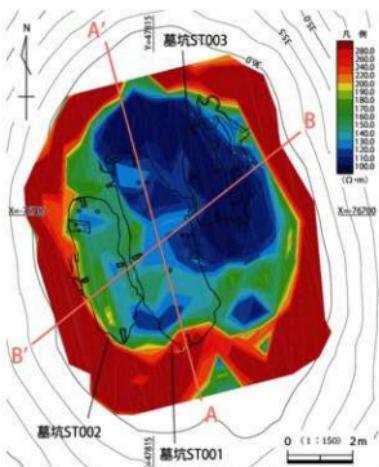
第44図 土層堆積状況と比較検討する比抵抗断面位置図



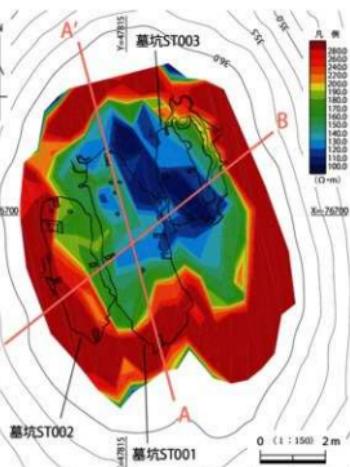
第45図 比抵抗断面(A-A'断面)と墓坑ST001断面図(第16図)



第46図 比抵抗断面(B-B'断面)と後円部東西3・6トレンチ断面図(第20図)



第47図 比抵抗平面分布図(標高36.0 m)



第48図 比抵抗平面分布図(標高36.2 m)



第49図 電気探査実施前の現地確認状況（上）と電気探査実施状況（下）

第5章 総括

第1節 常楽寺柿木田1号墳の墳丘盛土の定量分析

1 はじめに

常楽寺柿木田1号墳は、これまでの調査成果によって丘陵の地山を削り出して成形した墳丘の後円部に墓坑を形成して埋葬施設が設けられたことが分かっている。被葬者が埋葬されて墓坑に埋土を充填した後、後円部上面に盛土が施されている。盛土には大きく分けて、墓坑を覆う盛土（墓坑盛土）と後円部上面の外表を整える盛土（外表盛土）の2種類が存在していることが確認できた。これらの盛土内における遺物の有無および盛土の性格を明確にするため、墓坑が形成された範囲において盛土の内容物の確認を目的に水洗篩別を実施し、その結果をもとに内容物の定量分析を行った。

2 対象資料と内容物の設定

(1) 対象資料の種類と地区

今回の水洗篩別は、2種類の盛土のほか、各墓坑のサブトレーナーなどで採取した墓坑埋土なども対象としており、盛土の性格を把握するための比較資料とした。

後円部上の盛土の定量分析は、4つの地区（A～D区）を対象としており、2種類の盛土と墓坑埋土における種類別の比較に加え、地区別の比較ができるようにした（第50図）。なお、それぞれの地区について、厳密ではないが、A区は墓坑ST001北側上面、B区は墓坑ST002上面、C区は墓坑ST001南側上面、D区は墓坑ST003上面の範囲に概ね相当する。

(2) 内容物の分類

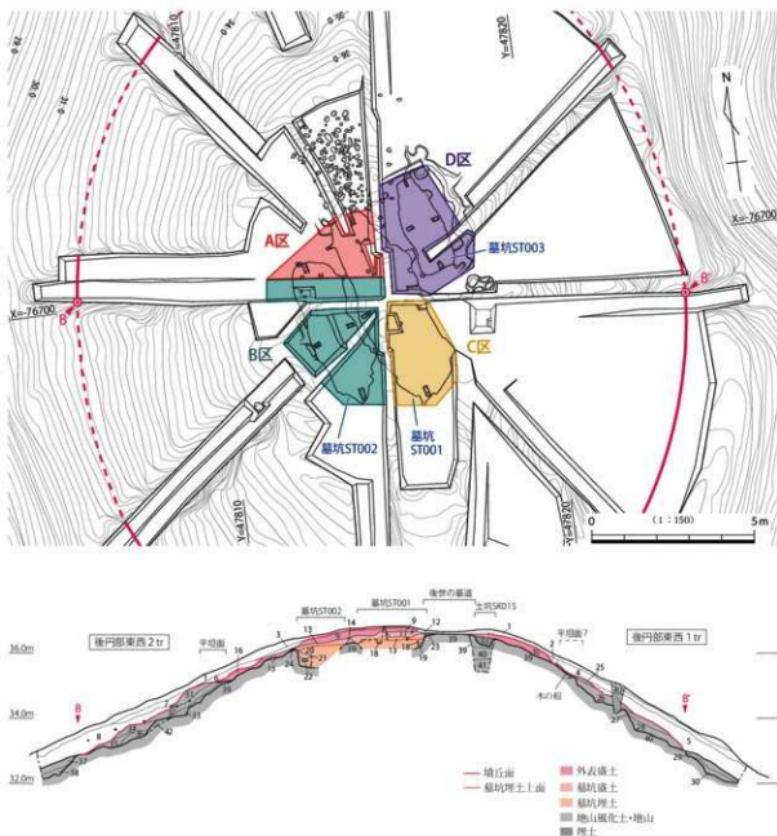
後円部の各トレーナーの土層堆積状況では、分析対象とする盛土や埋土に地山礫や地山ブロックが含まれており、これらは地山や地山風化土の掘削土を用いたと想定した。また布志名層に由来する地山は地点によってやや異なる様相を示すことが確認されており、盛土や埋土を構成する内容物の含有比率が類似する場合、比較的近い場所から採取した可能性が考えられ、異なる場合には別々の地点で採取したとの想定が可能になる。

地山に由来する盛土と埋土の内容物は、土砂のほかに地山礫が含まれていた。この地山礫は、半透明や不透明で光沢を帯びる礫とその他の礫に分類できる（第51図）。よって、土砂および光沢礫とその他の礫について、その含有比率を定量的に分析することにした。

3 水洗篩別の実施

(1) 水洗篩別の実施方法

盛土の一部は現地で篩を実施したが、大部分は現地から土のう袋で出雲弥生の森博物館に搬入し、





第52図 水洗篩別（左）と肉眼観察による内容物の分類（右）

その後に水洗篩別を実施した（第52図左）。水洗篩別には2mmメッシュの篩を用いており、それ以上の大きさの地山礫を水洗篩別によって選り分けたのち、博物館内において肉眼観察で光沢礫とその他の礫に分類した（第52図右）。

（2）含有遺物の確認

水洗篩別は盛土の性格を明らかにするために内容物を確認したほか、遺物の有無の確認も同時に行った。盛土のなかに主体部の副葬品や後世の遺物などが含まれていた場合には、乱掘を含めた後世の改変や削平を受けていた可能性を考慮する必要がある。

水洗篩別を実施して内容物を確認したところ、後円部東西1トレンチの墓坑盛土から弥生時代の小型の扁平片刃石斧（第29図9）が確認された。常楽寺柿木田1号墳が立地する場所の南側の丘陵上には弥生時代後期後葉の小規模な高地性集落が確認されており（宮本編2019）、常楽寺柿木田1号墳が立地する地点周辺にも弥生時代の遺構が存在した可能性を示している。その場合、それらの遺構が存在した地山や地山風化土を掘り込んで盛土に使用していたことを示唆する。その一方で、常楽寺柿木田1号墳の主体部の副葬品に関連する遺物や後世の遺物などは見つかっていない。

4 墳丘盛土の定量分析（第10・11表）

（1）埴丘盛土の重量比率

水洗篩別の対象とした盛土について、まずはこれらの重量比率を確認しておきたい。対象とする盛土および埋土の総計は約3,928kgであり、このうち外表盛土は約2,084kg、墓坑盛土は約1,654kg、その他の盛土は約20kgであり、墓坑埋土は約170kgであった。後円部の各トレンチの土層堆積状況では、墓坑盛土よりも外表盛土のほうが厚い場合が多く、その様子は重量比率からも追認することができる。

地区別の盛土量を確認してみると、墓坑ST001北側上面にあたるA区の盛土が約951kg、墓坑ST001南側上面のC区の盛土は約822kgで、合計すると1,773kgとなる。また墓坑ST002上面のB区の盛土は約1,424kg、墓坑ST003上面のD区の盛土は約179kgであった。後円部の各トレンチの土層堆積状況で示された層厚や各墓坑の規模を反映して、墓坑ST001、ST002、ST003の順に盛土量が少なくなる。

ここで地区別にみた盛土の重量比について、いくつか留意点を挙げておきたい。1点目は、A～D区のなかで、A・C・D区は墓坑盛土よりも外表盛土が多いが、対照的にB区では墓坑盛土の割合が高いことである。B区にあたる墓坑ST002上面は墳丘西側斜面に築かれており、埋葬後の墳丘の構築に多くの盛土が必要になったと考えられるが、その半分以上が墓坑盛土によって構築されたことを示唆すると思われる。

2点目は、A・C区とB区に比べてD区の盛土量がかなり少ない状況であった点である。これは、後円部東西1トレンチの土層堆積状況(第19図)にも示されているが、後世の墓道が概ね墓坑

第10表 墳丘盛土および埋土の重量と内容物の含有比率(地区別)

		重量(kg)				含有比率(%)			
		全 体	土 砂	地山礫		全 体	土 砂	地山礫	
				光沢礫	その他の礫			光沢礫	その他の礫
A区 (墓坑ST001 北側上面)	外表盛土	590.5	504.1	24.2	62.2	100.0	85.4	4.1	10.5
	墓坑盛土	360.7	343.2	4.6	12.9	100.0	95.1	1.3	3.6
	合 計	951.2	847.3	28.8	75.1	100.0	89.1	3.0	7.9
B区 (墓坑ST002 上面)	外表盛土	557.5	530.9	6.7	19.9	100.0	95.2	1.2	3.6
	墓坑盛土	866.1	830.9	9.0	26.2	100.0	95.9	1.0	3.0
	合 計	1,423.6	1,361.8	15.7	46.1	100.0	95.7	1.1	3.2
C区 (墓坑ST001 南側上面)	外表盛土	456.6	436.8	5.4	14.4	100.0	95.7	1.2	3.2
	墓坑盛土	365.8	346.4	5.3	14.1	100.0	94.7	1.4	3.9
	合 計	822.4	783.2	10.7	28.5	100.0	95.2	1.3	3.5
D区 (墓坑ST003 上面)	外表盛土	116.9	109.3	2.2	5.4	100.0	93.5	1.9	4.6
	墓坑盛土	61.8	58.5	0.8	2.5	100.0	94.7	1.3	4.0
	合 計	178.7	167.8	3.0	7.9	100.0	93.9	1.7	4.4
C～D区	外表盛土	362.5	342.1	5.5	14.9	100.0	94.4	1.5	4.1
-	その他盛土	19.5	18.4	0.3	0.8	100.0	94.4	1.5	4.1
-	墓坑埋土	170.1	162.1	2.3	5.7	100.0	95.3	1.4	3.4
総 計		3,928.0	3,682.7	66.3	179.0	100.0	93.8	1.7	4.6

第11表 墳丘盛土および埋土の重量と内容物の含有比率(種類別)

		重量(kg)				含有比率(%)			
		全 体	土 砂	地山礫		全 体	土 砂	地山礫	
				光沢礫	その他の礫			光沢礫	その他の礫
外表盛土	A区	590.5	504.1	24.2	62.2	100.0	85.4	4.1	10.5
	B区	557.5	530.9	6.7	19.9	100.0	95.2	1.2	3.6
	C区	456.6	436.8	5.4	14.4	100.0	95.7	1.2	3.2
	D区	116.9	109.3	2.2	5.4	100.0	93.5	1.9	4.6
	C～D区	362.5	342.1	5.5	14.9	100.0	94.4	1.5	4.1
	合 計	2,084.0	1,923.2	44.0	116.8	100.0	92.3	2.1	5.6
墓坑盛土	A区	360.7	343.2	4.6	12.9	100.0	95.1	1.3	3.6
	B区	866.1	830.9	9.0	26.2	100.0	95.9	1.0	3.0
	C区	365.8	346.4	5.3	14.1	100.0	94.7	1.4	3.9
	D区	61.8	58.5	0.8	2.5	100.0	94.7	1.3	4.0
	合 計	1,654.4	1,579.0	19.7	55.7	100.0	95.4	1.2	3.4
その他盛土	-	19.5	18.4	0.3	0.8	100.0	94.4	1.5	4.1
墓坑埋土	-	170.1	162.1	2.3	5.7	100.0	95.3	1.4	3.4
総 計		3,928.0	3,682.7	66.3	179.0	100.0	93.8	1.7	4.6

ST003上面を通過するように南北方向に設けられており、その造成によって盛土が削平を受けていたため、残存していた盛土が少なかったことを反映している。

(2) 内容物の含有比率

水洗篩別および肉眼観察で分類した土砂と地山礫について、地区別および種類別にみた含有比率を確認する。

まず全体的に見ると、盛土や埋土の内容物は、土砂が90%以上を占め、地山礫のなかで光沢礫が1.5%前後、その他の礫は3~4%になる地区が多いことが分かる。盛土や埋土は地山由来のものと考えられ、これがこの周辺の地山である布志名層の一般的な構成を示していると思われる。

ここで外表盛土と墓坑盛土における内容物の全体的な含有比率に着目してみると、外表盛土のほうが墓坑盛土よりも土砂の割合が低く、地山礫が多く含まれる傾向を示している。その一方で、墓坑盛土の土砂と地山礫の含有比率は土砂の割合が高く、外表盛土とはやや異なった内容物の含有比率を示していることが読み取れる。

外表盛土と墓坑盛土の内容物の含有比率を比較すると、外表盛土は土砂および2種類の地山礫とともに内容物の含有比率にはばらつきが認められるのに対して、墓坑盛土はどの地区でも含有比率にあまり変化は生じていない。これら含有比率の差異がどの程度の値で有意になるのかは検証の余地があるが、墓坑盛土における内容物の含有比率の値は、墓坑埋土の含有比率の値からみて土砂と地山礫とともに±0.6%の範囲のなかで収まっていることが分かり、内容物の含有比率がかなり近似することが明らかである。この様相を積極的に捉えれば、墓坑盛土と墓坑埋土は同じ地点、あるいは比較近い場所で採取されたものであるとの想定が可能である。

なお、A区の外表盛土では、地山礫の含有比率が他と比べてかなり高くなっているが、これは外表施設の調査で確認した礫群が一部に含まれることを示していると考えられる。A区は後円部北西側に位置しており、そこで展開する礫群は墓坑ST001北側の墳丘面の盛土上に敷設された礫敷SS001が後世の攪乱を受けて散乱したものである可能性が高い。そのため、盛土内にも一部の礫が混入したことと示唆する。このように外表盛土は、外部からの様々な影響を受けやすかったと推察され、それが含有比率にも反映されていると考えられる。

5 分析結果の考察

墳丘盛土は布志名層の地山や地山風化土の掘削土に由来すると考えられ、その内容物である土砂と地山礫の含有比率からみた定量分析を行ってきたが、その結果をまとめつつ、墳丘盛土の性格について考えてみたい。

墳丘盛土のうち、外表盛土は後世の造成により礫敷SS001に由来する礫が一部に混入したと思われ、外部からの様々な影響を反映していると思われるものの、それを考慮しても内容物の含有比率にはばらつきが生じていた。一方、墓坑盛土には含有比率に変化があり見られず、概ね一定の値を示している。また墓坑盛土の含有比率は、墓坑埋土の含有比率の値と近似するため、両者は同一地点、または比較的近い場所で採取されたと想定することができた。

これら盛土の性格について、墳丘構築の過程のなかに位置づけながら考えてみたい。墳丘が地山削り出しによって成形され、平坦面が整えられた後に墓坑が地山および地山風化土に掘り込まれるが、この時点で相当量の掘削土が発生していたと想定される。墓坑埋土は地山礫や地山ブロックが含まれており、地山や地山風化土の掘削土を利用したと考えられる。また墓坑埋土と墓坑盛土は同一地点や比較的近い場所の地山や地山風化土の掘削土に由来する可能性が定量分析で明らかになっており、墳丘構築における一連の工程として被葬者の埋葬後にこれらの掘削土を用いて墓坑埋土が充填され、その後すぐに墓坑盛土が施されたことが想定可能である。よって墓坑埋土から墓坑盛土までを一貫して行い主体部が構築されたと考えられる。このように考えると、B区の墳丘西側斜面に築かれた墓坑ST002の埋土上面には、他の地区よりも墓坑盛土が相対的に多く用いられていたが、それは墓坑ST001からST003を含む主体部全体を整えるために、他よりも低い位置にある墓坑ST002を墓坑盛土の段階で他の墓坑と同程度の高さまで揃えたと理解できる。その後に後円部全体の外面を整えるために外表盛土が施され、墳丘構築が仕上げられたと考えられる。

墳丘上に施された盛土について、定量的に詳細な分析を実施すると墳丘の構築過程のなかで盛土にも様々な役割が付与されている可能性があることが判明した⁽¹⁾。

常楽寺柿木田1号墳は、古墳時代前中期から中期初頭頃に比定でき、地山削り出しによる墳丘の成形が採用されているが、それ以降の時期は盛土による古墳の墳丘成形が主体的となるため、盛土の役割や性格についても、さらに複雑な様相を呈することが予想される。今回は墳丘盛土の定量分析という手法から盛土の性格について検討を重ねたが、中期以降における古墳の墳丘盛土の様々な役割についても、一定の方向性を示すことに貢献できる可能性があろう。

(幡中光輔)

註

(1) 墳丘の構築過程に関しては、五反田古墳群（安来市）や南外2号墳（松江市）などの報告のなかで、古墳時代前期から中期の古墳における土層堆積状況の詳細な観察により、盛土を含む墳丘の構築過程が検討されている（池淵1998、川原2007）。

参考文献

- 池淵俊一 1998 「五反田古墳群の位置づけとその評価」『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡（門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群）』一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14 島根県教育委員会 295～314頁
- 川原和人 2007 「総括」『南外2号墳・勝負遺跡』国道485号線道路改築事業（松江第五大橋道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1 島根県教育委員会 118～138頁
- 宮本正保編 2019 『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5 島根県教育委員会

第2節 出雲平野周辺の墳丘上における葬送儀礼の場とその変遷

1 はじめに

常楽寺柿木田1号墳の発掘調査では、主体部内部の詳細な調査を行っていないため、埋葬施設などの詳しい情報は得られていない。一方、主体部上から土器は出土しなかったものの、前方部やくびれ部周辺で少量ながら前期末から中期初頭頃の土師器が出土した。こうした常楽寺柿木田1号墳の調査成果は、この地域における古墳時代前半期（前期・中期）の葬送儀礼の様相を理解するうえで重要な位置を占めると考えられる。そこで、ここでは出雲平野周辺の墳丘上における葬送儀礼の場所とその変遷について、これまでの調査成果を踏まえて、出雲平野周辺のなかでの常楽寺柿木田1号墳の位置づけを明確にしながら検討することにしたい。

2 出雲平野周辺の弥生墳丘墓および古墳の変遷（第53図）

墳丘上での葬送儀礼は、弥生時代後期後葉の弥生墳丘墓で特に盛んに行われており、古墳時代前半期の葬送儀礼の変遷を検討するには弥生時代後期後葉の弥生墳丘墓の葬送儀礼を把握する必要がある。そのため、まずは常楽寺柿木田1号墳が所在する出雲平野周辺を中心とする弥生時代後期後葉から古墳時代前半期の編年（池澤2015、岩本2018、松山2018）をもとに墳墓の様相を概観する。

（1）弥生時代後期後葉から終末期

出雲平野周辺では西谷墳墓群を中心とした四隅突出型墳丘墓が弥生時代後期後葉に出現し、終末期まで連続と丘陵上に築かれていく（藤永編2000、坂本編2006、波邊・坂本編2015）。この頃には中野美保遺跡や青木遺跡（仁木編2004、今岡ほか編2006）など平野部でも四隅突出型墳丘墓が築造されるほかは目立った墳墓は形成されていない。なお、三田谷I遺跡（今岡・梶田編1999）の方形周溝墓のように、四隅突出型墳丘墓以外の墳墓もこの時期に確認できる。

（2）古墳時代前期

古墳時代前期初頭から前葉頃になると、出雲平野中央部周辺では時期が不確かな方墳の権現山古墳（萩編2003）が確認できるが、その他には目立った古墳は築造されない。その一方で、斐伊川中流域には、土井・砂古墳群や神原正面北古墳群（蓮岡1984、田原ほか編2001、松山2002）などの方墳を中心とする古墳群が前期初頭頃から相次いで築かれ、前期前葉頃には大型の方墳である神原神社古墳（蓮岡ほか編2002）が出現する。

その後、前期前葉から中葉頃になると出雲地方で最古段階の前方後方墳とされる松本3号墳や松本1号墳（山本1963、出雲考古学研究会編1991）が築造される。なお、前期後葉には斐伊中山2号墳（杉原・藤原編1993）など方墳が築かれるものの、目立った古墳は確認されなくなる。

斐伊川中流域で古墳が減少する前期中葉から後葉頃には、神西湖周辺で浅柄II古墳や浅柄北古墳（川原編2005、今岡編2009）などの方墳や円墳が形成されるが、こうした状況のなかで、穴道湖西岸周辺に出雲地方のなかで最古級となる前方後円墳の大寺1号墳（仁木編2005）が築かれる。その後、神



時期	土器編年		集成編年 畿内 出雲	中西國編年 (前期)	神西湖周辺	出雲平野中央部周辺	穴道湖西岸周辺	穴道湖南岸周辺	斐伊川中流域周辺
	畿内	出雲							
後 世 紀 代 終 末 期	出生V 庄内0-1 庄内2+3	草田3 草田4 草田5				西谷3号 ■ 40×30 西谷2号 ■ 36×26 西谷4号 ■ 34×27 西谷9号 ■ 43×35 西谷6号 三田谷2号 三田谷3号 ■ 17×8 ■ 8×8 ■ 13×12	青木1号 ■ 14×8 中西國1号 ■ 11×10 青木3号 ■ 11×9 青木2号 ■ 9×7		
前 世 紀 初 期	布留0 布留1古 布留1新	(草田6) 大木 小谷1 小谷2 小谷3古 小谷3新	I						土井・印 1号 2号 3号 4号 5号 6号 ■ ■ ■ ■ ■ ■ 10 9×8 9×8 9×8 11×8 11×10 神明正北 4号 ■ 7×7 ■ 17×12
古 墳 朝 代 前 期	古道 神 代 前 期	布留2古 布留2新	II			藤原山 ■ 19×12			神明社 ■ 10×26 松本3号 ■ 52 松本1号 ■ 50
古 墳 朝 代 中 期	古道 神 代 中 期	布留3古 布留4古 TK232	III			浅野II ■ 20×16	西谷7号 ■ 23×18	大寺1号 ■ 52	斐伊中山2号 ■ 15×12
古 墳 朝 代 後 期	古道 神 代 後 期	布留5古 布留6古 TK216 ON46 TK208 TK23 TK27	IV			山田 ■ 24 當麻寺跡木庭1号	西谷11号 ■ 18 西谷16号 ■ 11 北光寺 ■ 64	西谷1号 ■ 35 西谷2号 ■ 10×8 西谷3号 ■ 9×9 西谷15号 ■ 15×15	篠原1号 ■ 10 篠原2号 ■ 30 篠原千人塚 ■ 30 小丸子山 ■ 12 神明御船山 ■ 49
■赤色は時間の初期が乏しいことを示す ■緑色は時間は中期を示す ■緑色は時間の後期を示す ■緑色は時間の後期を示す									

第53図 出雲平野周辺の弥生墳丘墓および古墳の分布と変遷

西湖周辺では山地古墳（川上編 1986）が築造される。山地古墳は円墳として報告されているが、その一方で古墳が立地する丘陵西南部には平坦面が広がり、前方部として成形されたことも想定される。その場合には前方後円墳の可能性も否定できない。これらの古墳の出現後に築かれた前方後円墳が常楽寺柿木田1号墳（宮本編 2019）である。

その他、出雲平野中央部周辺には、かつて四隅突出型墳丘墓が多数築かれた場所に近接して前期後葉から末頃と考えられる西谷7号墓や18号墓・21号墓（藤永編 2002、坂本編 2006）などの方墳が認められる。

（3）古墳時代中期

中期初頭から前葉頃には円墳が広く盛行するようであり、神西湖周辺では間谷東古墳（景山・曾田編 2008）や雲部3号墳（西尾・野坂 2000）、出雲平野中央部周辺においては西谷11号墓・16号墓（川上ほか編 1993、坂本編 2006）などが形成される。またこの頃には、穴道湖南岸周辺に結10号墳（穴道 1990）や大型の円墳である軍原古墳（西尾・大國 1991、大谷 1994・1996a・1996b・2012）、穴道湖西岸周辺では円墳の荒木1号墳が確認できる（本庄考古学研究室 1986・池淵 2015）。

こうした状況下のなかで、中期中葉から後葉頃の神西湖周辺に北光寺古墳（仁木編 2007）が出現する。北光寺古墳は大型前方後円墳であり、この時期の出雲地方で最大級の規模を誇る。その他、出雲平野中央部周辺に池田古墳（米田編 2001）、穴道湖南岸周辺には軍原千人塚古墳、小丸子山古墳、白塚古墳（池田 1972、穴道編 1992、仁木 2014、池淵 2015）などの円墳や方墳が盛んに築造されるが、詳細な時期は不明である。

中期末頃になると、出雲平野中央部周辺で方墳の西谷15号墓（川上ほか編 1993）が形成される以外は目立った古墳は見られなくなる。一方、穴道湖南岸周辺には方墳の結11号墳（穴道 1990）のほか、大型の前方後円墳である神庭岩船山古墳（田中 2016、内田ほか 2018）が出現する。

3 墳丘上の葬送儀礼の研究略史

ここまで出雲平野周辺の弥生時代後期後葉から古墳時代前半期にかけての墳墓の変遷を確認してきたが、墳丘上の葬送儀礼を検討するにあたり、これまでの主な先行研究の論点を整理しておきたい。

（1）弥生墳丘墓の葬送儀礼

弥生時代の墳丘墓における墳丘上の葬送儀礼については、古くからの調査事例が豊富な瀬戸内地方の様相が注目される。瀬戸内地方は当時の最大規模の弥生墳丘墓が構築された地域であり、それに伴い古くから墳丘上の儀礼が注目されていた。弥生時代後期後葉の楯築弥生墳丘墓（岡山県倉敷市）（近藤 1992）における墳丘上の土器について、共飲共食をもとにした祖靈祭祀が行われた痕跡を示していると指摘されている（近藤 1983）。一方で、矢藤治山弥生墳丘墓（岡山市）（近藤編 1995）では、主体部上に明確な土器はみられずに角礫が展開する状況が確認され、その状況を踏まえて中四国地方の弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓で礫や土器が主体部上に残される事例が類型化されて整理されている（大谷 1995）。

山陰地方でも、楯築弥生墳丘墓と同じ頃に四隅突出型墳丘墓を主体とした西谷墳墓群（出雲市）が

形成される。西谷墳墓群は出雲平野中央部に位置し、弥生時代後期後葉から終末期にかけて大型の四隅突出型埴丘墓が累々と築造されている。そのなかでも西谷3号墓の主体部上には多量の土器が集積されており、これらは葬送儀礼が終了した状態を示し、共飲共食儀礼などの飲食儀礼が主体部上で行われていたことが想定されている（渡邊1993、渡邊2015a）。

（2）前期古墳の葬送儀礼

一方、古墳時代前期の葬送儀礼の特質は、弥生埴丘墓の主体部上で行われた共飲共食の葬送儀礼とは異なり、副葬品にみる諸集団からの奉獻品や大和政権からの下賜品の授受に反映される政治関係の確認や更新が本質にあるとの見解が示されている（渡邊1997）。

また、前期古墳の埴丘上の葬送儀礼については、古墳出現前後の時期において西日本の各地の葬送儀礼や祭祀の広域的な比較検討が進められた（古屋2002）。このなかでは山陰地方の様相も明らかにされており、前期前半までは主体部上に土器を配置する傾向が多いことが示され、四隅突出型埴丘墓における主体部上の土器配置を系統的に踏襲している。そして前期後半以降になると、円筒埴輪による圓繞配列が展開する様相へと移り変わり、圓繞配列の外側に土器が配置されるとともに、共飲共食の飲食儀礼に用いる実用器から供獻儀礼として象徴化した儀器として配置される役割へと変遷する傾向があることが指摘されている（古屋2002・2011）。それに伴い弥生時代の葬送儀礼に系譜を持つ特殊壺や特殊器台、二重口縁壺などから小型精製土器やミニチュア土器、土製品などへと用いられる土器に変化が生じ、それまでの儀礼の形式化が進行する（廣瀬2016）。前方部からミニチュアの手捏ね土器が出土した常楽寺柿木田1号墳の様相は、こうした儀礼の形式化が進む汎地域的な状況を反映していると理解できよう。

出雲地方での前期古墳における埴丘上の葬送儀礼の全体的な変遷は、概ねこれまでに示されてきた流れに沿うと考えられる。その一方で、出雲地方では東部と西部で様相が異なっている可能性がある。例えば、築造時期が前期後葉頃の出雲西部の前方後円墳である大寺1号墳では、発掘調査のなかで埴輪が確認されておらず、同時期頃に築かれて円筒埴輪や鱗付円筒埴輪が出土した出雲東部の前方後円墳の廻田1号墳（松江市）とは様相を異にする点が指摘されている（増田編2004）。出雲地方ではこれらの前方後円墳を最古段階として把握できるが、埴丘上での葬送儀礼や祭祀の在り方に地域性が生じていることを示唆すると考えられる。そのため、出雲平野周辺を中心とした出雲西部での埴丘上の葬送儀礼について詳細に検討することで、常楽寺柿木田1号墳における埴丘上の葬送儀礼の評価が可能になろう。

4 常楽寺柿木田1号墳における埴丘上の葬送儀礼（第54図）

常楽寺柿木田1号墳における埴丘上の葬送儀礼について、これまでの試掘確認調査や今回の発掘調査において明らかになった内容をもとに、その様相を確認する。

（1）後円部上の葬送儀礼

常楽寺柿木田1号墳の後円部上では、埴丘の成形時に形成された後円部中段付近の平坦面が確認され、盛土がなされるまでは露出していたと考えられる。そのため、埋葬や葬送儀礼の墓道や作業面と

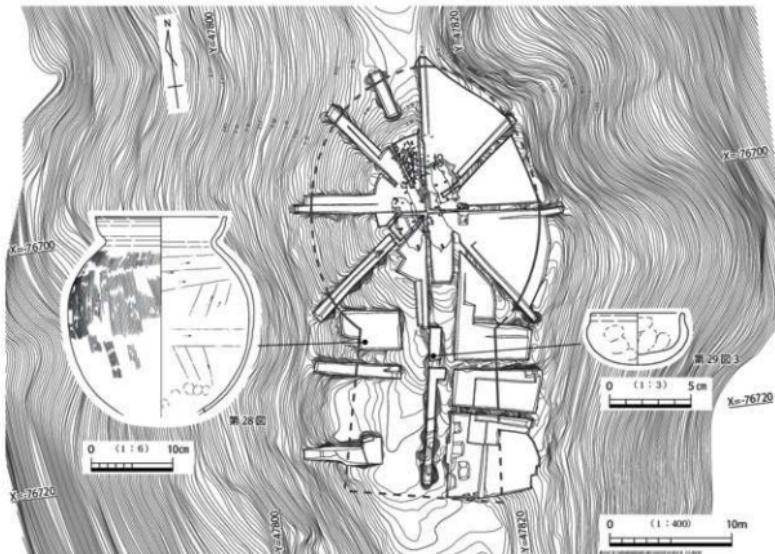
して機能した可能性がある。一方で、墓坑埋土内部および上面やその周辺からは遺物の出土などは確認できず、また定量分析を行った盛土内からも遺物が出土しなかった。このように後円部上を精査しても土器が出土しなかったことを積極的に捉えれば、常楽寺柿木田1号墳では後円部上の主体部周辺で土器を用いた葬送儀礼は行われなかった可能性が高い⁽¹⁾。なお、また外表施設として埴輪なども確認されていないが、墓坑ST001の北側を中心として後円部北西側の盛土上に展開していたとみられる礫敷SS001を確認している。

(2) 前方部・くびれ部での葬送儀礼

一方、前方部やくびれ部周辺では土師器が出土している。前方部に近いくびれ部では土師器壺（第28図）が確認され、後円部の裾部に近い前方部の墳丘上面においてはミニチュアの手捏ね土器（第29図3）が出土した。これらは前方部やくびれ部付近における葬送儀礼で用いられた土器であると考えてよいだろう。

(3) 常楽寺柿木田1号墳の葬送儀礼の場

常楽寺柿木田1号墳では後円部上において北西側に礫敷が確認され、何らかの葬送儀礼がなされた可能性はあるが、少なくとも土器を用いた葬送儀礼は行われなかった蓋然性が高い。一方で、前方部やくびれ部周辺では、少量ながら土師器壺やミニチュアの手捏ね土器が出土しており、土器を用いた葬送儀礼が行われたことを示唆する。つまり、前期末から中期初頭頃に位置づけられる常楽寺柿木田1号墳において、土器を使用する葬送儀礼は後円部上ではなく、前方部やくびれ部周辺を中心に行われていた可能性が高いと考えられる。



第54図 常楽寺柿木田1号墳の墳丘上の出土土器

5 弥生時代後期後葉から古墳時代前半期における墳丘上の葬送儀礼の検討

常楽寺柿木田1号墳の葬送儀礼の様相を出雲平野周辺の地域的な変遷のなかで理解して評価することが必要になるため、ここでは各時期における墳丘上での土器出土状況から葬送儀礼が行われた場所が推察できる調査事例を取り上げて具体的に検討することにしたい。

(1) 西谷3号墓（弥生時代後期後葉）（第55図）

出雲平野中央部周辺の大型の四隅突出型墳丘墓である西谷3号墓は、墳丘上の第4主体上において多量の弥生土器が集積された状況であり、山陰系の複合口縁壺や鼓形器台および低脚环のほか、丹越系の無頸壺や装飾壺および高环形器や高环、吉備系の特殊壺や特殊器および普通装飾器台など多種多様な系統や器種の土器が確認されている（渡邊・坂本編2015）。こうした状況から、北陸地方や瀬戸内地方に由来する人々が参列し、そうした地域との紐帶や外交的な結びつきがあったことが想定されており（渡邊2015b），主体部上では各地域の多様な土器を用いて葬送儀礼が行われた様子が具体的に想起される。

また、葬送儀礼の終了後に土器が片付けられた様子が発掘調査で確認されたが、その土器の出土状況を詳しく見ると、無作為に集積されたのではなく、明確に系統別に配置分けがなされており、葬送儀礼において系統ごとに異なる役割が付与された可能性が推測できる（山根・幡中2015）。

つまり、弥生時代後期後葉の四隅突出型墳丘墓では、各地域の土器を用いた葬送儀礼が主体部上で行われることが多く、葬送儀礼が終了した後にも系統別に配置分けがなされるなど、一連の壮大な葬送儀礼が行われたことが分かる。葬送儀礼の規模は葬られた被葬者の社会的地位や影響力によって異なると思われるが、他の四隅突出型墳丘墓でも主体部上から土器が出土している事例が目立ち、主体部上での葬送儀礼が盛んに行われていたことは想像に難くない。

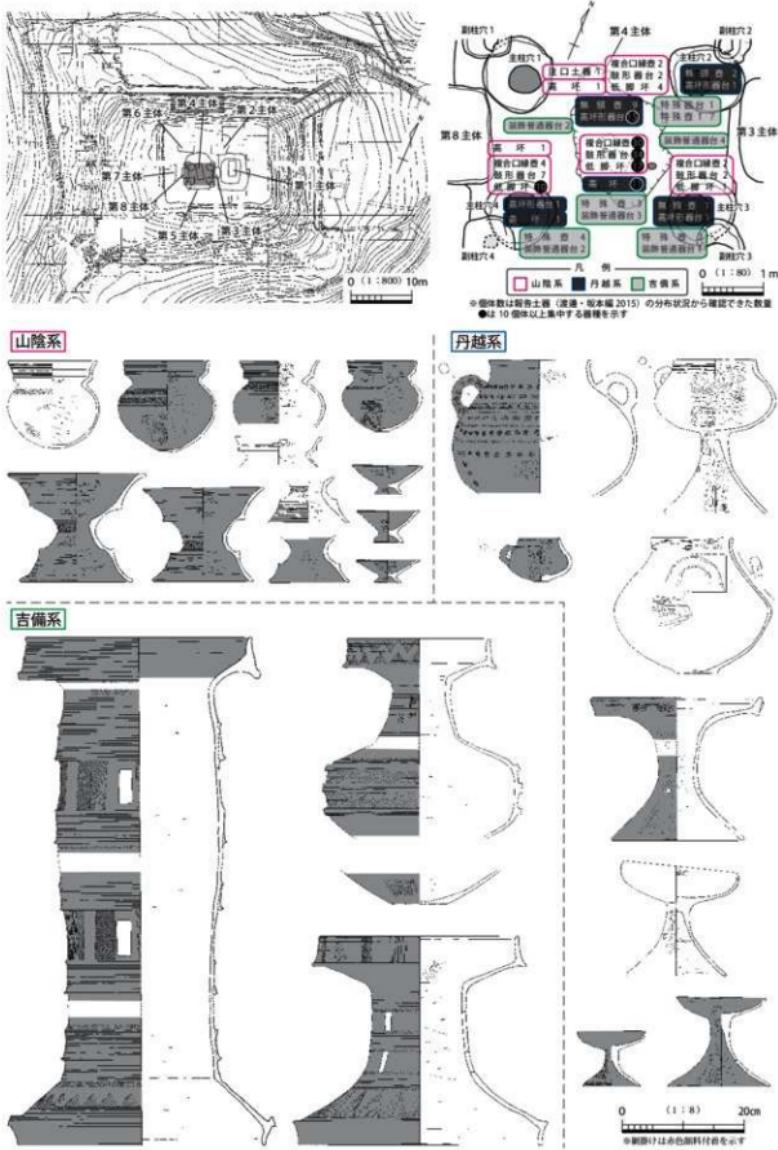
(2) 神原神社古墳（古墳時代前期前葉）（第56図）

出雲地方において前方後円墳や前方後方墳が築かれる以前の前期初頭から前葉頃には方墳が広く展開する。斐伊川中流域周辺の大型方墳である神原神社古墳では、主体部の豊穴式石室内から「景初三年」銘三角縁神獸鏡が出土しており注目される。主体部内の石室外側には埋納坑を設けて供獻土器を埋納しており、埋納坑内にはベンガラと水銀朱で構成された赤色顔料が確認されている。

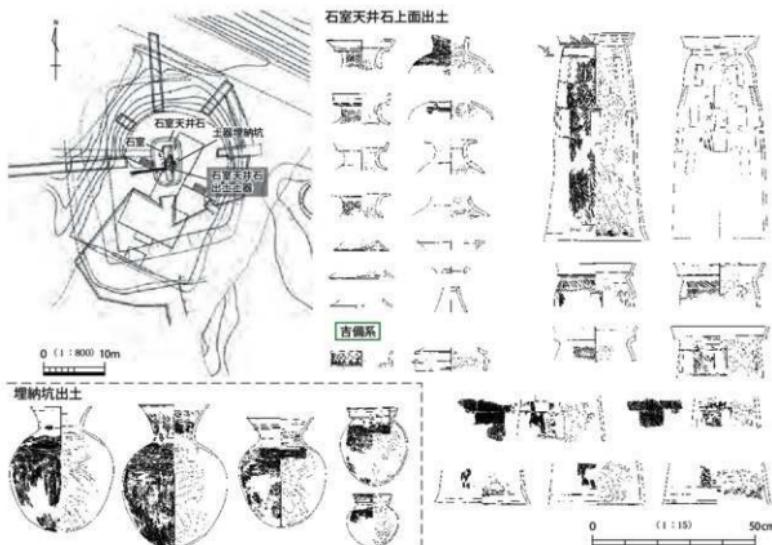
石室天井石の上面では、土師器の壺や甕、高环などのほかに山陰型の特殊器台とされる円筒形器台が出土しており、埋葬に伴う葬送儀礼に使用されて、その後に天井石上面に埋納されたと考えられる（蓮岡ほか編2002）。また壺のなかに吉備系の特殊壺の系譜を引くと考えられるものもあり、弥生時代後期後葉と共に通する器種が用いられたことを示唆する。古墳時代前期前葉頃は、弥生時代後期後葉から引き続き主体部上を中心として葬送儀礼が行われていたことが考えられる⁽²⁾。

(3) 松本1号墳（古墳時代前期中葉）（第57図）

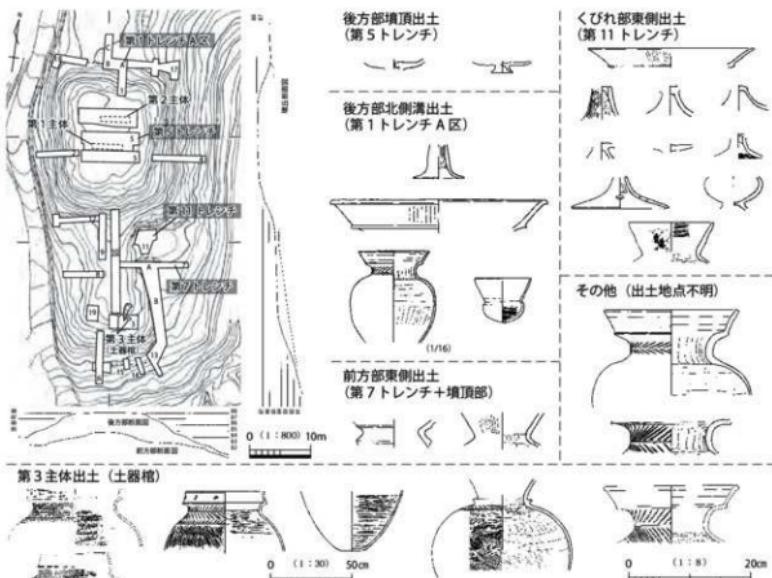
出雲地方では前方後方墳が前期前葉頃から確認され、斐伊川中流域周辺において松本3号墳が前期前葉頃に築造されたと考えられる。松本3号墳に後続する松本1号墳は前期中葉頃に比定でき、墳丘上から土師器が出土している（山本1963、出雲考古学研究会編1991）。また、前方部端部に近い墳丘上



第55図 西谷3号墓の墳丘上の出土土器



第 56 図 神原神社古墳の墳丘上の出土土器



第 57 図 松本 1号墳の墳丘上の出土土器

には土師器の大型の壺などを用いた土器棺が2箇所で確認されており(山本1963), 後方部上のはか前方部上にも埋葬施設を設けていた様子が分かる。

後方部の主体部周辺からは高環と低脚環が出土しているほか, 後方部北側の裾部付近の溝内から壺や高環および小型丸底壺が出土している。溝内出土の土器は墳丘端部上面の葬送儀礼に用いられたものが転落したのか, 後方部斜面や溝周辺で行われた葬送儀礼に伴うものかは判然としないが, 葬送儀礼は主体部直上のほか, 他の場所においても行われた可能性を示唆する。さらにくびれ部からは高環や楕形土器・壺形土器, クビレ部に近い前方部周辺では壺と鼓形器台が出土しており, 主体部上のはか後方部の裾部や前方部およびくびれ部周辺においても葬送儀礼が行われたことが読み取れる。

この時期に前方後方墳の構造に伴い墳丘面が拡大し, 弥生時代後期後葉や古墳時代前期前葉と比べて埋葬場所や葬送儀礼の場所が広がったと考えられる。しかし, 墳丘面が広がる状況とは対照的に葬送儀礼に用いられた土器が減少し, 他地域系の土器の影響が確認できなくなる傾向が指摘できる⁽³⁾。

(4) 大寺1号墳(古墳時代前期後葉)(第58図左)

前方後円墳の出現は, 出雲地方では前期後葉から確認でき, 出雲地方で最古段階の大寺1号墳が築かれる。大寺1号墳では, 墳輪は見つかっていないが葺石が確認されている。後円部上では古い時期の発掘調査によって竪穴式石室が見つかり, 近年その内容が整理されているが, 後円部上における主体部周辺からの土器の出土は確認されていない(仁木編2005)。もし仮に古い時期の調査で後円部上の主体部周辺から土器が出土していたとしても, かなり少量ではなかったかと推測される。

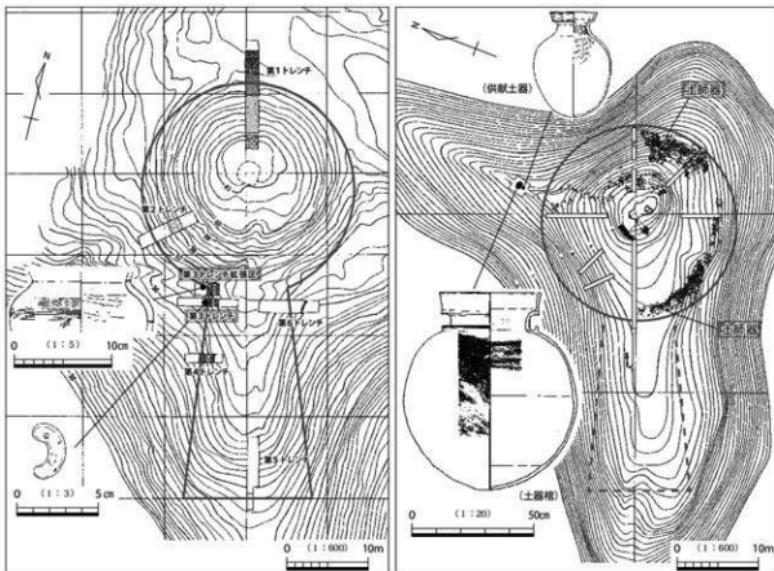
近年の発掘調査では, クビレ部から土師器の甕や勾玉が1点ずつ出土している(仁木編2005)。これらの遺物は転石下から確認されており, 転石が葺石に由来して古い時期に崩落したと想定すれば, 原位置からそれほど動いておらず, クビレ部周辺で行われた葬送儀礼に用いられたと考えられよう。

これらの資料状況から総合的に推察すると, 主体部周辺では土器を用いた葬送儀礼は行われずにくびれ部周辺で行われたと考えられるが, 用いられた土器についてはかなり少なかったと思われる。

(5) 山地古墳(古墳時代前期末葉)(第58図右)

山地古墳は, 報告のなかで円墳として把握されている一方, 古墳が立地する丘陵西南部には平坦面が広がり, 前方部として成形された可能性を持つ⁽⁴⁾。葺石が墳丘裾付近を廻るほか, 第1主体の墓坑南側に礫群が確認され, 排水施設の一部と考えられている⁽⁵⁾(川上編1986)。また墳丘から少し離れた北側の位置で土師器の大型の壺を用いた土器棺とそれに伴う供献土器が確認され, 古墳時代前半期の土器様相のなかで検討されている(松山2000)。

調査報告によると, 主体部上面を含む墳丘上は削平を受けているため, 主体部周辺での土器の出土状況は不明であるが, 周辺に散乱している状況は確認できないため, 大寺1号墳と同様に主体部周辺における土器を用いた葬送儀礼は行われなかっただけの可能性が高い。一方で, 蓐石のある墳丘裾周辺では2箇所で土師器が出土したとの報告がある(川上編1986)。それらの土師器の詳細な報告はなく⁽⁶⁾, 正確な時期は不明であるが, 土器棺や供献土器の時期に近いものであれば, 墳丘上の葬送儀礼に用いられたことが推測される。その出土位置は, 山地古墳を前方後円墳と仮定した場合, 後円部の裾部付近とくびれ部周辺から出土している。



第58図 大寺1号墳（左）および山地古墳（右）の墳丘上の出土土器

推論を重ねた形になるが、山地古墳が前方後円墳であった場合、後円部上の主体部周辺での土器を用いた葬送儀礼の痕跡は確認できず、後円部裾やくびれ部周辺で葬送儀礼が行われたと想定できる。

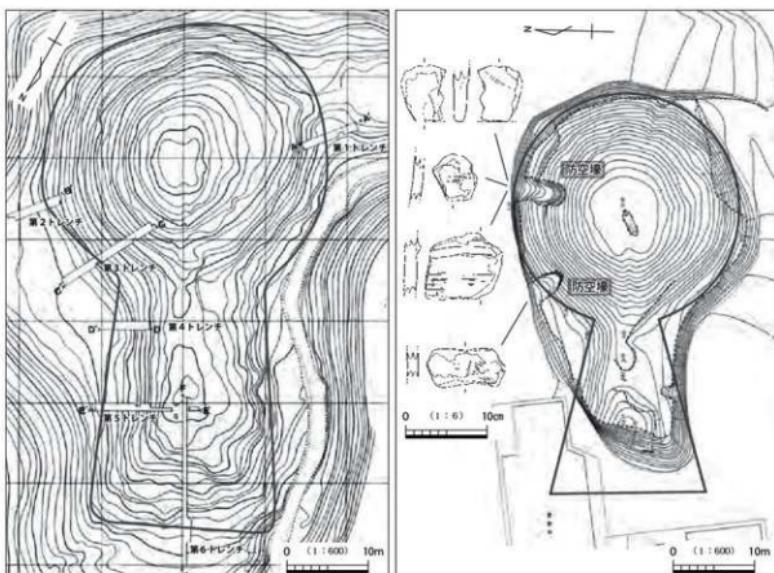
（6）北光寺古墳（古墳時代中期中葉～後葉）（第59図左）

前期末から中期初頭頃の常楽寺柿木田1号墳における様相は前述のとおり、後円部上の主体部周辺で土器を用いた葬送儀礼は行われなかった蓋然性が高く、前方部やくびれ部周辺での葬送儀礼が行われたことを示唆していた。その後の時期に位置づけられる大型の前方後円墳である北光寺古墳は、出雲地方の古墳時代前半期に築かれた前方後円墳のなかで最大規模を誇り、この地域一帯を治めた首長が埋葬されたと考えられる。発掘調査によって葺石の存在や前方部の埋葬施設の一部が明らかにされているものの、埴輪や土器などは確認されていない（仁木編2007）。

トレンチ調査が主体であるため全容は不明とせざるを得ないが、各トレンチからの出土遺物は認められず、墳丘裾部などに散乱している様子も確認できない。これらの状況を積極的に評価すれば、土器を用いた葬送儀礼は墳丘上でほとんど行われなかったという見方ができよう。

（7）神庭岩船山古墳（古墳時代中期末葉）（第59図右）

神庭岩船山古墳では、これまで複数回にわたり測量を中心とした調査が実施され、既往の調査成果を整理して詳細な測量図面が公表された（内田ほか2018）。古墳時代中期において出雲平野周辺で北光寺古墳に次ぐ規模を誇る前方後円墳であり、穴道湖南岸周辺一帯を統治する首長墳であったと推測される。これまでの調査では葬送儀礼を示す土器などは確認されていないが、後円部裾に造られた防空壕



第59図 北光寺古墳（左）および神庭岩船山古墳（右）の墳丘上の出土土器

を埋める際に実施された調査で円筒埴輪が数点出土している（田中 2016）。原位置を保っていない状態であるが、出土地点から後円部に樹立された埴輪の一部であると推測される。

出雲平野周辺において埴輪が確認されている調査事例は、中期初頭頃の西谷 11号墓などが知られている（坂本編 2006）。この地域では中期以降から埴輪が採用されており、そのなかで前方後円墳である神庭岩船山古墳にも樹立されたと考えられる。全面的な調査が実施されていないため断定はできないが、過去の調査の表探資料も埴輪のほかには確認されていないため、土器を用いた葬送儀礼はほとんど行われなかった可能性が考えられる。

6 出雲平野周辺における葬送儀礼の場とその変遷

これまで、弥生時代後期後葉から古墳時代前半期の弥生墳丘墓および古墳の変遷を概観したうえで、墳丘上の葬送儀礼の先行研究における論点を抽出し、出雲平野周辺の弥生時代後期後葉から古墳時代前半期において墳丘上の葬送儀礼の場所が推察できる調査事例を具体的に検討してきた。またここで取り上げた調査事例以外の弥生墳丘墓や古墳についても墳丘上出土土器とその出土地点を中心に一覧で整理しており（第12表）、それらの内容をもとに葬送儀礼の場所の時期的な変遷を整理する。

（1）墳丘上の葬送儀礼の時期的変遷

弥生時代後期後葉頃の葬送儀礼は四隅突出型墳丘墓の主体部上で土器が多量に集積されており、土器を用いた葬送儀礼が盛大に行われていたことが分かる。そこには丹越系や吉備系など他地域に由来する土器も多く、そうした地域との紐帯や外交的な結びつきを物語るものとして評価されている。ま

第12表 出雲平野周辺の弥生時代後期後葉から古墳時代前半期の弥生墳丘墓と古墳および墳丘出土土器一覧

た。西谷3号墓で確認できたように、葬送儀礼後に集積される状況も明確に系統別に配置分けがなされており、土器自体が葬送儀礼のなかで重要な意味を持っていたことを示している。

前期初頭から前葉頃において、前方後方墳や前方後円墳の出現以前の古墳についても、主体部上やその周辺から土器が出土する事例が確認でき、神原神社古墳から出土した土器には吉備系の系譜を引く壺なども認められているため、弥生時代後期後葉以降からの葬送儀礼が継承されていると考えられる。しかし一方で、墳丘壠など主体部以外からの土器の出土も目立つようになり、葬送儀礼の内容や土器の役割にも一部で変化の兆しが認められる。

前期前葉から中葉頃に前方後方墳が出現すると、その傾向は顕著になる。松本1号墳では、後方部上の主体部周辺のほかに後方部の裾部や前方部およびくびれ部周辺からも土器が出土した。その一方で、主体部上に土器を集積する様相は看取できない。また墳丘面が拡大して葬送儀礼の場所も広がったが、葬送儀礼に用いられた土器の総量が減少する傾向にあり、他地域系の土器の影響も顕著ではなくなるなど、弥生時代後期後葉以降の葬送儀礼からその内容は変化していた蓋然性が高い。

前期後葉から末頃には、前方後円墳が築かれ始めるものの、墳丘上から出土する土器はさらに減少している。大寺1号墳ではくびれ部で1点出土し、山地古墳は不明な部分が多いが墳丘裾部などで数個体程度の出土に留まると考えられる。つまり、後円部の主体部上での土器を用いた葬送儀礼はほとんど行われず、墳丘壠やくびれ部などを中心に葬送儀礼が行われたと想定される。

中期になるとさらにその傾向が強まり、北光寺古墳や神庭岩船山古墳において、現状では土器の出土は確認できず、断定はできないものの、土器を用いた葬送儀礼はほとんど行われなかつたと推測される。そのなかで神庭岩船山古墳では埴輪が数点認められるなど、中期では土器を用いた葬送儀礼が行われなくなる時期に運動するように埴輪をもつ古墳が散見される点も注目される。

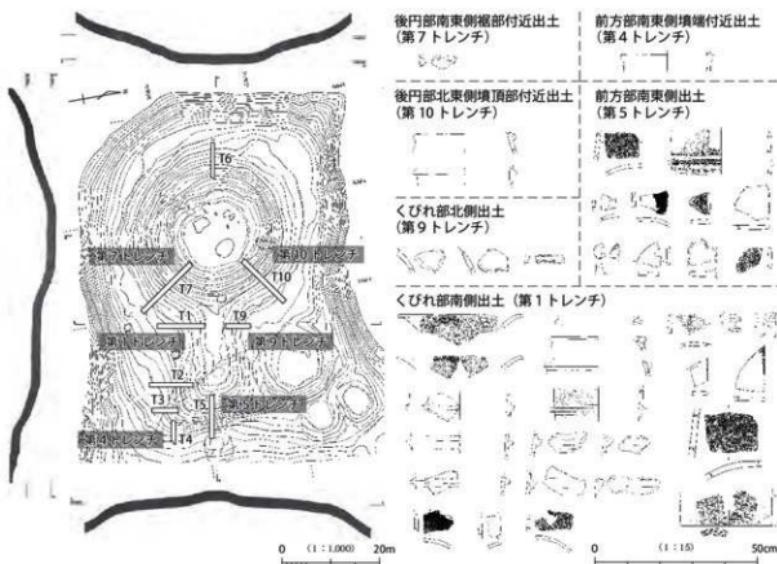
(2) 墓輪からみた出雲地方の東西差

墳丘上の埴輪については、埴輪の樹立を土器配置の延長線上に位置づけて、埴輪による圓錐配列の出現が画期となることが指摘されている（古屋2002）。ここで出雲東部の様相に目を向けると、大寺1号墳と同時期の前期後葉頃に築造された前方後円墳の廻田1号墳（第60図）や大型円墳である上野1号墳（松江市）（林・原田編2011）では既に埴輪が樹立されており、それ以降の時期では多くの古墳で埴輪が樹立される。一方、出雲西部の出雲平野周辺では埴輪が樹立されたと考えられる調査事例が増加するのは神庭岩船山古墳などの中期末以降であるため、出雲東部と西部で埴輪の樹立が普及する時期に明確な時期差が生じている点は注目してよい。

(3) 常楽寺柿木田1号墳の評価と位置づけ

これまでの弥生時代後期後葉からの葬送儀礼の様相について、その変遷を整理すると、当初は主体部上で多量の土器を用いて行われていた葬送儀礼が次第に主体部以外の場所でも行われるようになり、用いられる土器の量も相対的に減少する傾向を示している。つまり、墳丘上の葬送儀礼は古墳時代前期のなかで、主体部上から後円部の裾部付近および前方部やくびれ部周辺へとその場が変化し、用いられた土器の意味合いも変容したと考えられるのである。

前期末から中期初頭頃の常楽寺柿木田1号墳は、後円部上の全面的な精査や盛土内の定量分析を実



第60図 田辺1号墳の埴丘上の出土土器

施しても当時の遺物は確認されず、前方部やくびれ部周辺から少量の土器が出土している状況にある。また出土した土器にはミニチュアの手捏ね土器が含まれ、儀礼の形式化や供献儀礼として象徴化した儀器としての役割へと変化する様相（古屋2002・2011、廣瀬2016）を具体的に示しているなど、葬送儀礼のあり方にも変化が生じている。

これまでの時期別にみた葬送儀礼の変遷について想像を逞しくすれば、弥生時代後期後葉から続く葬送儀礼に内包された思想や概念が変容し、新たな思想や概念を取り入れた秩序のもとに社会が再編されていく過程を示しているのかもしれない。そのように捉えると、常楽寺柿木田1号墳の葬送儀礼の様相は、弥生時代後期後葉から継続する埴丘上の葬送儀礼が時期的に変遷するなかで、土器を用いた葬送儀礼が盛行しなくなった出雲平野周辺の中期の社会を方向づける画期と位置づけられよう。

そうした状況下において、古墳時代前半期で最大級の前方後円墳である北光寺古墳が築かれる現象は注目される。こうした大型の前方後円墳出現の背景には、弥生時代後期後葉から継承される土器を用いた葬送儀礼に込められた思想や概念が変容した出雲平野周辺の社会状況が少なからず反映されていると考えられる。また、北光寺古墳に後続する神庭岩船山古墳の出現以降に埴輪の樹立が普及することも、出雲平野周辺において埴丘上での葬送儀礼が新たな局面を迎えることを示していると考えられるが、中期以降の様相については、今後様々な視点から具体的に検討を重ねる必要があろう。

(幡中光輔)

註

- (1) 土器が使用されたとしても、葬送儀礼終了後に別の場所に移して埋納あるいは廃棄されていたことも考えられる。いざれにしろ、常楽寺柿木田1号墳の後円部上には土器を配置・残置しなかったと推察される。
- (2) 神原神社古墳の事例は、厳密には石室天井石上面での埋葬に伴う葬送儀礼であるが、この時期には主体部埋土内からの出土事例なども確認されており、ここではこれらを含めて主体部上の葬送儀礼として一括で扱った。
- (3) 古い時期の発掘調査（山本1963）で出土した土器は再整理され、改めて紹介されている（出雲考古学研究会編1991）。調査当時はそれ以外の土器も出土していた可能性はあるが、それでも西谷3号墓や神原神社古墳の状況のように、主体部上や石室天井石上面の1箇所にまとめて大量に出土する状況ではなかったと想定される。
- (4) 発掘調査の報告（川上編1986）では、丘陵頂部の第2主体付近から丘陵西南部の平坦面向かってトレント調査がなされており、削平を受けて墳丘が損なわれたとされるものの、丘陵頂部だけではなく平坦面上にも緩やかに盛土が認められる。盛土は二次堆積の可能性もあるが、平坦面が前方部として機能した可能性も完全には否定できないため、ここでは前方後円墳の可能性を含めて検討する。
- (5) 山地古墳の第1主体に伴う礫群の配置状況は、常楽寺柿木田1号墳の墓坑ST001北側を中心として後円部北西側に展開した礫敷SS001と共に通している点が注目される。常楽寺柿木田1号墳の礫敷も排水施設の可能性を持つが、盛土上面に敷設されており、墳丘構造や理葬に伴う葬送儀礼などに関連した施設の可能性も残る。なお、山地古墳の第1主体の上部は削平されて詳細は不明であるが、第1主体に伴う礫群はそうした葬送儀礼に関する施設としての性格を帯びていたのかもしれない。
- (6) 原画面や調査時の写真などで確認できる限りでは、出土した土器は数点程度であったと推察される。

参考文献

- 今岡一三編 2009『御崎谷遺跡・間谷東遺跡・浅柄北古墳・間谷西II遺跡・間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III 島根県教育委員会
- 今岡一三・梶田勝造編 1999『三田谷I遺跡（Vol.1）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V 島根県教育委員会
- 今岡一三・平石 充・松尾亮晶編 2006『青木遺跡II（弥生～平安時代編）』国道431号道路改築工事（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III 島根県教育委員会
- 池田満雄 1972「古墳とその時代」『斐川町史』斐川町教育委員会 92～117頁
- 池淵俊一 2015「出雲の古墳編年について」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター研究論集第14集 島根県古代文化センター 19～32頁
- 出雲考古学研究会編 1991『松本古墳群—斐伊川流域の前期古墳をめぐって—』古代の出雲を考える7
- 岩本 崇 2018「古墳出土土器をめぐって 副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」「前期古墳編年を再考する」六一書房 137～148頁
- 内田律雄・曳野律夫・松本岩雄 2018「出雲市斐川町神庭岩船山古墳墳丘測量報告」「島根考古学会誌」第35集 島根考古学会 21～38頁
- 大谷晃二 1994「斐川町軍原古墳について（上）」「八雲立つ風土記の丘」No.127 島根県立八雲立つ風土記の丘 7～8頁

- 大谷晃二 1995 「弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団 73～79頁
- 大谷晃二 1996a 「斐川町軍原古墳について（中）」『八雲立つ風土記の丘』No.136 島根県立八雲立つ風土記の丘 4～7頁
- 大谷晃二 1996b 「斐川町軍原古墳について（下）」『八雲立つ風土記の丘』No.137 島根県立八雲立つ風土記の丘 2～5頁
- 大谷晃二 2012 「出雲市斐川町軍原古墳について（続）」『八雲立つ風土記の丘』No.209 島根県立八雲立つ風土記の丘 2～5頁
- 景山真二・曾田辰雄編 2008 『玉泉寺裏遺跡・浜井場4号墳・間谷東古墳』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 島根県教育委員会
- 川上 稔編 1986 『山地古墳発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 川上 稔・松山智弘・湯村 功・米田美江子編 1993 『飯川南地区広域農地農道整備事業に伴う西谷15・16号墓発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 川原和人編 2005 『畠ノ前遺跡・菅原I遺跡・クボ山遺跡・菅原II遺跡・菅原III遺跡・菅原IV遺跡・保知石遺跡・浅柄II遺跡・柳ノ内I遺跡』山陰自動車道鳥取益田線（穴道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2 島根県教育委員会
- 近藤義郎 1983 『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎 1992 『橋築弥生墳丘墓の研究』橋築刊行会
- 近藤義郎編 1995 『矢藤治山弥生墳丘墓』矢藤治山弥生墳丘墓発掘調査団
- 坂本豊治編 2006 『西谷墳墓群—平成14年～16年度発掘調査報告書一』出雲市教育委員会
- 穴道年弘 1990 「島根県東部における古墳時代前半期の群集小墳について」『島根考古学会誌』第7集 島根考古学会 95～100頁
- 穴道年弘編 1992 『島根県斐川町 遺跡分布調査報告書』斐川町文化財調査報告 10 斐川町教育委員会
- 杉原清一・藤原友子編 1993 『斐伊中山古墳群—西支群一』本次町教育委員会
- 田中 大 2016 「出雲市神庭岩船山古墳出土の円筒埴輪」『古代文化研究』第24号 島根県古代文化センター 1～24頁
- 田原淳史・和田康宏・仁木 聰編 2001 『湯の奥遺跡・登安寺遺跡・湯後遺跡・土井・砂遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 12 島根県教育委員会
- 仁木 聰 2014 「出雲西部の豪族たち」『倭の五王と出雲の豪族 ヤマト王権を支えた出雲』島根県立古代出雲歴史博物館企画展図録 島根県立古代出雲歴史博物館 160～162頁
- 仁木 聰編 2004 『中野美保遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ 島根県教育委員会
- 仁木 聰編 2005 『大寺1号墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書 29 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 仁木 聰編 2007 『北光寺古墳発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書 36 島根県教育庁文化

- 財課古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 西尾克己・大國晴雄 1991『出雲平野の古墳』出雲市民文庫9 出雲市教育委員会
- 西尾克己・野坂俊之 2000『湖陵町内の遺跡』『湖陵町誌』湖陵町 212 ~ 233 頁
- 萩 雅人編 2003『長堀遺跡 Vol.2 権現山古墳』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 XVII 島根県教育委員会
- 蓮岡法暉 1984『加茂町の古代(古代1)』『加茂町誌』加茂町 39 ~ 62 頁
- 蓮岡法暉・勝部 昭・松本岩雄・宮沢明久・西尾克己・山崎 修編 2002『神原神社古墳』加茂町教育委員会
- 林 健亮・原田敏照編 2001『上野遺跡・竹ノ崎遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9 島根県教育委員会
- 廣瀬時賀 2016「葬送儀礼とその変化」『古墳とは何か—葬送儀礼からみた古墳—』大阪府立近つ飛鳥博物館平成28年度春季特別展図録 大阪府立近つ飛鳥博物館 135 ~ 139 頁
- 藤永照隆編 2000『西谷墳墓群—平成10年度発掘調査報告書—』出雲市教育委員会
- 古屋紀之 2002「古墳出現前後の葬送祭祀—土器・埴輪配置から把握される葬送祭祀の系譜的整理—」『日本考古学』第14号 日本考古学協会 1 ~ 20 頁
- 古屋紀之 2011「土器と土製品の古墳祭祀」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学3 同成社 181 ~ 192 頁
- 本庄考古学研究室 1986「出雲的主要古墳一覧」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集 山本清先生 喜寿記念論集刊行会 639 ~ 657 頁
- 増田浩太編 2004『松江市東部における古墳の調査 廟所古墳・觀音山古墳群・廻田古墳群』島根県古代文化センター調査研究報告書 23 島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 松山智弘 2000「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会 99 ~ 130 頁
- 松山智弘 2002「出雲における墳墓の変遷」『神原神社古墳』加茂町教育委員会 243 ~ 249 頁
- 松山智弘 2018「地域の画期と社会変動 山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房 311 ~ 322 頁
- 宮本正保編 2019『常楽寺柿木田古墳群—弥生時代集落の調査—』一般国道9号(出雲湖陵道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 島根県教育委員会
- 山根 航・幡中光輔 2015「第4主体の土器群出土状況の検討」『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・出雲弥生の森博物館研究紀要第5集 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館 57 ~ 65 頁
- 山本 清 1963『松本古墳調査報告』島根県教育委員会
- 米田美江子編 2001『池田古墳』一畑バス営業所用地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 渡邊貞幸 1993「弥生墳丘墓における墓上の祭儀—西谷3号墓の調査から—」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会 153 ~ 160 頁
- 渡邊貞幸 1997「弥生墳丘墓の祭祀と古墳の祭祀」『古代出雲文化展—神々の国 悠久の遺産—』古代出雲文化展

図録 島根県教育委員会 80～81頁

渡邊貞幸 2015a「第4主体の諸問題」『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・

出雲弥生の森博物館研究紀要第5集 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館 239～244頁

渡邊貞幸 2015b「西谷3号墓の達成」『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・

出雲弥生の森博物館研究紀要第5集 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館 245～254頁

渡邊貞幸・坂本豊治編 2015『西谷3号墓発掘調査報告書』島根大学考古学研究室調査報告第14冊・出雲弥生

の森博物館研究紀要第5集 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館

挿図出典

第53図・第12表：池淵 2015・岩本 2018・松山 2018をもとに編年を作成 第55図：渡邊・坂本編 2015

に加筆 第56図：蓮岡ほか編 2002に加筆 第57図：山本 1963・出雲考古学研究会編 1991をもとに作成

第58図左：仁木編 2005に加筆 第58図右：川上編 1986・松山 2000および地形測量原図をもとに作成

第59図左：仁木編 2007に加筆 第59図右：田中 2016・内田ほか 2018をもとに作成 第60図：増田編

2004に加筆

第6章 結語

今回の常楽寺柿木田1号墳の発掘調査は、これまでに実施されていた測量調査や試掘確認調査の成果をもとに、古墳の墳丘構造や外表施設の有無のほか、後円部上に存在する可能性のある主体部の確認などを目的に実施した。発掘調査によって様々な内容が確認され、常楽寺柿木田1号墳の様相が明らかになってきた。ここでは、これまでの発掘調査や分析などの成果を簡潔に整理して結語をしたい。

1 古墳の墳丘規模と外表施設

常楽寺柿木田1号墳の墳丘の規模や構築過程などの墳丘構造を明らかにするため、墳丘上に設定した各トレンチの土層堆積状況を詳細に検討し、墳丘端部を把握した。各トレンチの土層堆積状況の検討と同時に後円部東側の調査区を中心とした全面的な精査を行い、墳丘端部ラインを復元している（第3章第5節第30図）。これにより過去の調査で前方後円墳の要素として示されてきた内容を追認でき、常楽寺柿木田1号墳は最大で全長約35mの前方後円墳である蓋然性が高まった。

常楽寺柿木田1号墳の外表施設は、墳丘東側の全面的な精査の結果、埴輪や葺石などは確認できなかったものの、後円部北側の盛土上に展開する礫敷SS001が見つかっている。また表土に混じって礫群が確認されたが、これは後世の擾乱を受けて散乱した礫敷SS001の一部と考えられ、その範囲を考慮すると、礫敷SS001は後円部北西側に展開していたと考えられる。

2 主体部の墓坑と被葬者像

後円部上の全面的な精査を行った結果、主体部の墓坑を3基確認することができた。中央の墓坑ST001が3基のなかで最も大きく、西側の墓坑ST002はそれに次ぐ規模である。最も規模が小さいのは東側の墓坑ST003であった。なお、墓坑内部の詳細な調査は行っていないため、具体的な埋葬施設などは明らかになっていない。墓坑はそれぞれ隣接しているが重複関係ではなく、同時期または比較的近い時期に形成されたと推測される。

各墓坑の主軸方向は北西（N15°W）に揃えられており、北西延長上にある水域とその周辺の平野部を意識した可能性がある。古墳時代前半期には常楽寺柿木田1号墳の周辺で集落遺跡が比較的多く確認されており（第3章第5節第32図）、水上交通の要所である当時の水域の南側とその周辺集落を掌握した首長が埋葬された可能性が考えられる。

3 墳丘の構築過程について

常楽寺柿木田1号墳は、後円部と前方部ともに地山削り出しで墳丘が成形されたと考えられる。墳丘成形後には地山を掘り込んで墓坑を形成し、被葬者が埋葬されたと考えられるが、埋葬に伴う葬送儀礼も同時に行われたと推測される。後円部中段付近では、特に西側において平坦面が確認されており、埋葬や葬送儀礼における墓道や作業面としての役割を担っていた可能性が考えられた。

その後に墳丘盛土がなされるが、盛土は墓坑を覆う墓坑盛土と後円部上の外表を整える外表盛土の2種類が存在しており、盛土完了後に礫敷SS001が配置されたという構築過程を復元することができた。また前方部やくびれ部周辺で土師器が見つかっており、この付近で葬送儀礼が行われた可能性が高いと考えられる。この葬送儀礼は埋葬に伴うものか、あるいは埋葬後のある段階で行われたものであると推測される。

4 出土遺物と築造時期

古墳からの出土遺物は少ないため、2010年度試掘確認調査でくびれ部付近から出土した土師器の甕（第28図）が築造時期を検討するうえで重要な要素となる。この土器は、形態的な特徴や胎土の要素を考慮すると、小谷4式から大東式に取まる可能性が高く、常楽寺柿木田1号墳の築造時期は古墳時代前期末から中期初頭頃に位置づけられると想定できる。

5 後円部上の電気探査の成果

発掘調査の実施前から後円部上には主体部が存在する可能性が指摘されており、発掘調査と並行して道路の法面工事の設計に着手する必要があったため、調査に先行して後円部上の電気探査を行うことで主体部の位置や規模および深さと地山の位置が推定できる情報を取得した。

電気探査の結果、後円部上で長方形の窪みが地山上に確認されており、規模は異なるが発掘調査で確認した墓坑ST001の位置と概ね重なることが検証されている（第4章）。そのため電気探査は、地下の情報を推定できる有効な手段になり得ると考えられる。

6 墳丘盛土の定量分析について

常楽寺柿木田1号墳の後円部上に施された盛土には、墓坑盛土と外表盛土が確認されていた。これらの盛土内における遺物の有無および盛土の性格を明確にするため、墓坑の範囲に施された盛土を中心に水洗篩別を実施し、その結果をもとに内容物の定量分析を行った（第5章第1節）。

盛土は主に地山および地山風化土の掘削土を利用していたと考えられたが、地山は地点によってやや異なる様相を示すことが墳丘上のトレンチの土層堆積状況から明らかになっていた。定量分析の結果、墓坑盛土を構成する内容物は墓坑埋土と近似していたため（第5章第1節第10・11表）、墳丘構築における一連の工程のなかで考えると、地山および地山風化土を掘り込んで墓坑を形成し、その掘削土を利用して被葬者の埋葬後に墓坑埋土が充填され、その後すぐに墓坑盛土がなされたという想定が可能になった。

7 葬送儀礼からみた常楽寺柿木田1号墳の位置づけ

今回の常楽寺柿木田1号墳の発掘調査では、後円部上を精査したが遺物は認められず、これまでの試掘確認調査などの成果を総合しても出土遺物は少ない。一方で、前方部やくびれ部周辺から土師器の甕（第28図）やミニチュアの手捏ね土器（第29図3）が出土した状況は、この時期の葬送儀礼の

様相を考えるうえで注目される。そのため、弥生時代後期後葉から古墳時代前半期にかけての出雲平野周辺における墳丘上で行われた葬送儀礼の場所の変遷について検討を行い、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造されたと考えられる常楽寺柿木田1号墳の位置づけを考察した（第5章第2節）。

検討のなかでは弥生時代後期後葉から古墳時代前半期にかけて、葬送儀礼に用いられる土器の量とともに葬送儀礼の場所が次第に変遷していく様子が具体的に確認できた。この様相は、弥生時代後期後葉以降から続く葬送儀礼に内包された思想や概念が変容し、新たな思想や概念を取り入れた秩序のもとに社会が再編される過程を示していると考えられ、前期末から中期初頭頃の常楽寺柿木田1号墳はその変容の画期として位置づけられる。

その後に出現する北光寺古墳は、古墳時代前半期の出雲地方で最大級の前方後円墳であるが、墳丘上からの出土遺物はなく、土器を用いた葬送儀礼の痕跡はほとんど確認できない。こうした大型の前方後円墳が出現する背景にも、葬送儀礼に反映される思想や概念の変容が生じた出雲平野周辺の社会状況が少なからず影響していると考えた。

8 今後の展望と課題

常楽寺柿木田1号墳の発掘調査によって様々な内容が明らかになり、常楽寺柿木田1号墳は、出雲平野周辺における古墳時代前半期の様相を把握するために重要な役割を果たすことが確認できた。

古墳時代中期以降には出雲平野周辺の各地で前方後円墳が築かれるようになり、古墳時代前期末から中期初頭頃に築造された前方後円墳である常楽寺柿木田1号墳は、その社会状況についても影響を与えていると考えられる。また古墳時代後期後半には、古墳時代において出雲地方最大級の前方後円墳である今市大念寺古墳が出雲平野中央部周辺に築造されており、今後はそうした状況を踏まえて常楽寺柿木田1号墳の位置づけを古墳時代全体のなかで検討していくことが求められる。

（幡中光輔）

図 版



古墳遠景 調査前（1）（南から神西湖と北山山系を望む）



古墳遠景 調査前（2）（北東から中国山地を望む）

図版2 古墳遠景（2）



古墳遠景 調査後（1）（南から神西湖と北山山系を望む）



古墳遠景 調査後（2）（北東から中国山地を望む）

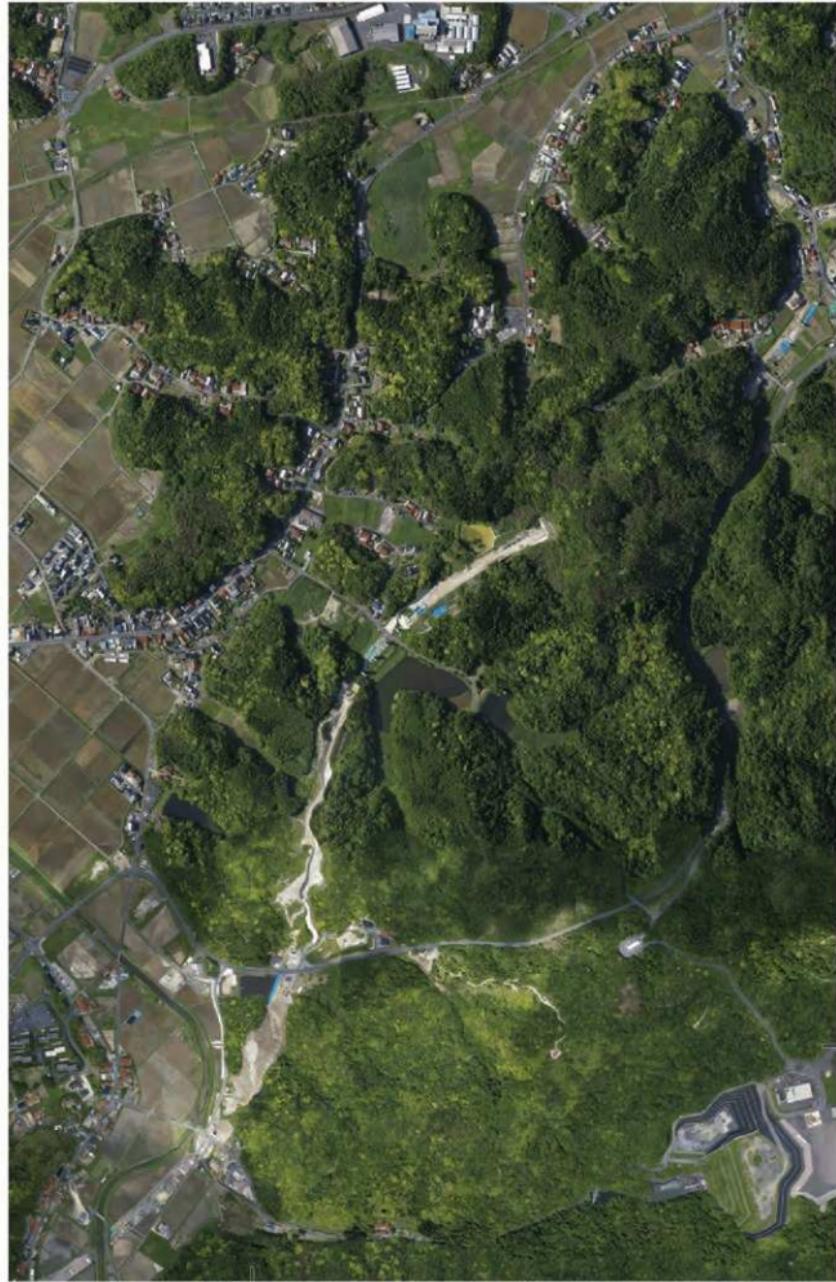


古墳遠景 調査後（3）（東から）



古墳遠景 調査後（4）（西から）

図版4 古墳周辺全体図（1）



古墳周辺地形 調査後（1）（オルソン画像、上が北。常楽寺柿木田1号墳はトンボの位置）



古墳周辺地形 調査後（2）（微地形立体図、上が北。常楽寺柿木田1号墳はトンボの位置）

図版6 丘陵全体図（1）



古墳立地丘陵 調査後（1）（微地形立体図、南西から）



古墳立地丘陵 調査後（2）（微地形立体図、西から）

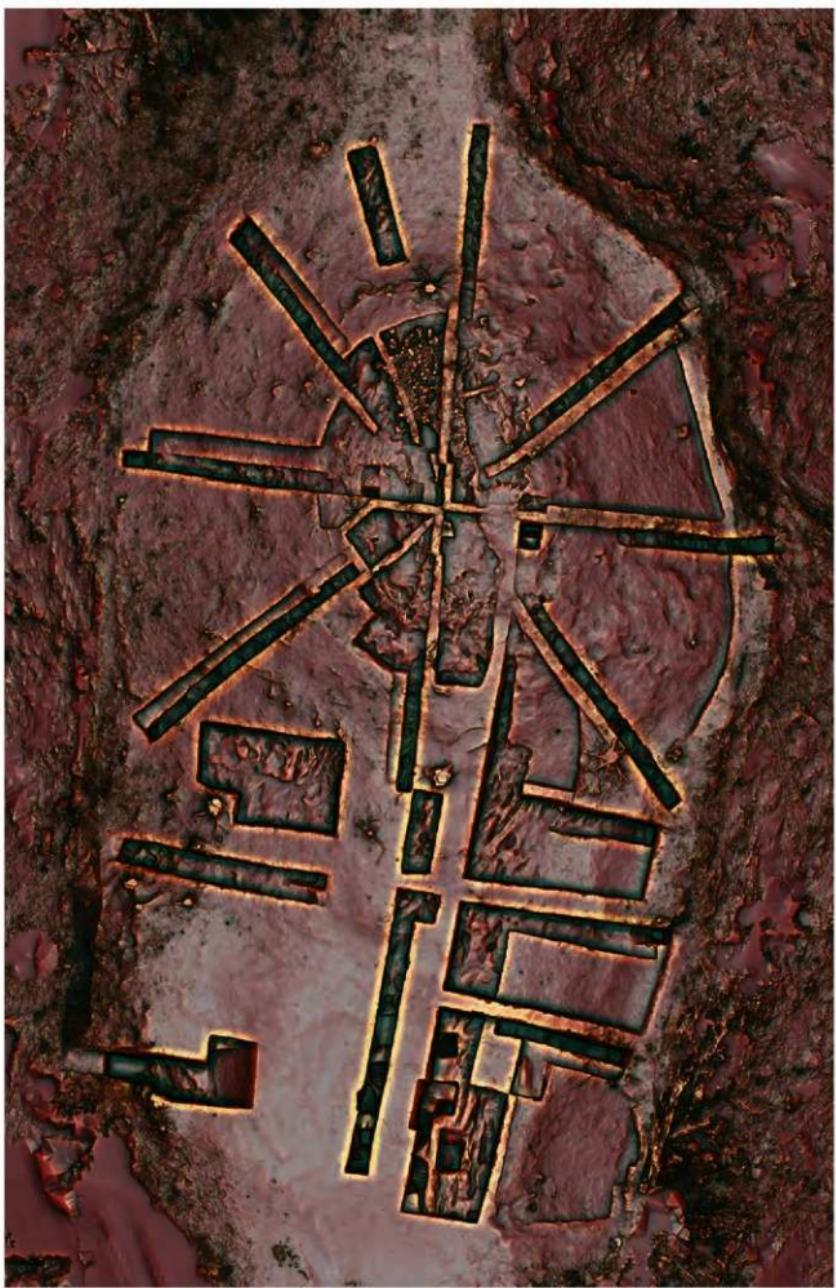


古墳立地丘陵 調査後（3）（微地形立体図、真上から、上が北）

図版 8 完掘状況全体図（1）



古墳完掘状況 オルソ画像（真上から、上が北）

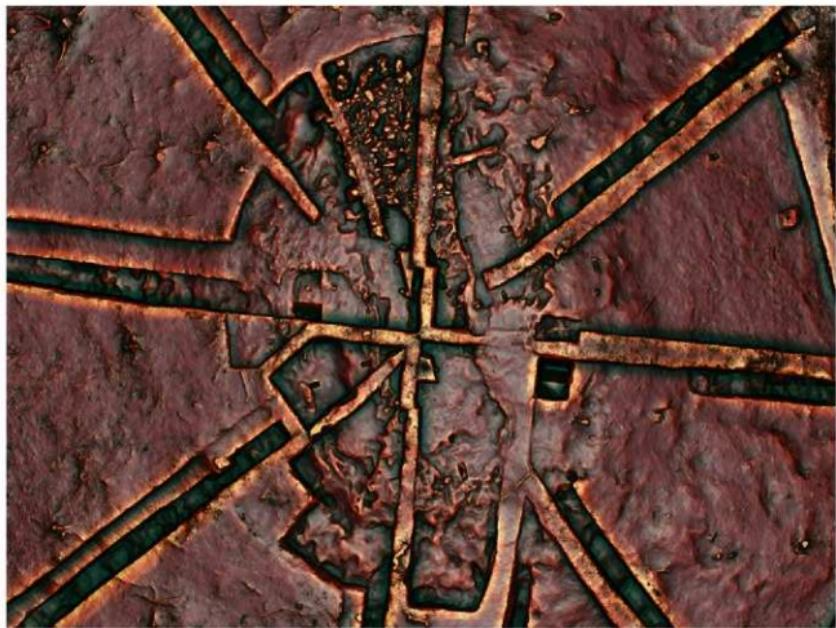


古墳完掘状況 赤色立体地図（真上から、上が北）

図版 10 主体部の墓坑（1）



墓坑 ST001 ~ ST003 オルソ画像（真上から、上が北）



墓坑 ST001 ~ ST003 赤色立体地図（真上から、上が北）



墓坑 ST001（中央）・墓坑 ST002（左）・墓坑 ST003（右） 緊出状況（南から）



墓坑 ST001（中央）・墓坑 ST002（右）・墓坑 ST003（左） 緊出状況（北から）

図版 12 主体部の墓坑（3）



墓坑 ST001 北側 検出状況（南から）



墓坑 ST001 南側 検出状況（東から）



墓坑 ST001 東側 盛土堆積状況（北東から）



墓坑 ST001 南端サブトレンチ 埋土堆積状況（東から）



墓坑 ST001 北端サブトレンチ 埋土堆積状況（東から）



墓坑 ST001 東端サブトレンチ 埋土堆積状況（北から）



墓坑 ST001 西端サブトレンチ 埋土堆積状況（北西から）

図版 14 主体部の墓坑（5）



墓坑 ST001・ST002 北側 盛土堆積状況（北から）



墓坑 ST002 北側 掘出状況（北西から）



墓坑 ST002 南側 検出状況（東から）



墓坑 ST002 西側 埋土堆積状況（西から）



墓坑 ST002 南端サブトレンチ 埋土堆積状況（東から）



墓坑 ST002 北端サブトレンチ 埋土堆積状況（西から）



墓坑 ST002 西端サブトレンチ 埋土堆積状況（南から）



墓坑 ST002 東端サブトレンチ 埋土堆積状況（南から）

図版 16 主体部の墓坑（7）



墓坑 ST003 検出状況（1）（南西から）



墓坑 ST003 検出状況（2）（北西から）



墓坑 ST003 南側 盛土堆積状況（南から）



墓坑 ST003 北側 盛土堆積状況（北東から）



墓坑 ST003 南端サブトレンチ 埋土堆積状況（東から）



墓坑 ST003 北端サブトレンチ 埋土堆積状況（東から）



墓坑 ST003 東端サブトレンチ 埋土堆積状況（北から）



墓坑 ST003 西端サブトレンチ 埋土堆積状況（北から）

図版 18 塗丘の外表施設（1）



石群 検出状況（1）（南東から）



石群 検出状況（2）（南東から）



石群 検出状況（3）（東から）



石群 検出状況（4）（西から）



礎敷 SS001 検出状況（1）（南東から）



礎敷 SS001 検出状況（2）（東から）



礎敷 SS001 検出状況（3）（北から）



礎敷 SS001 検出状況（4）（西から）

図版 20 後円部の調査（1）



後円部南北1トレンチ 完掘状況（1）（南東から）



後円部南北1トレンチ 完掘状況（2）（北西から）



後円部南北2トレンチ 完掘状況（1）（南西から）



後円部南北2トレンチ 完掘状況（2）（北西から）



後円部東西1トレンチ 完掘状況（南東から）



後円部東西1トレンチ 土層堆積状況（1）（南から）



後円部東西1トレンチ 土層堆積状況（2）（南から）



後円部東西 2 トレンチ 完掘状況（北西から）



後円部東西 2 トレンチ 完掘状況（2）（北東から）



後円部東西 2 トレンチ 土層堆積状況（北から）



後円部東西 3 トレンチ 完掘状況（北から）



後円部東西 4 トレンチ 完掘状況（東から）

図版 22 後円部の調査（3）



後円部東西5トレンチ 完掘状況（北から）



後円部東西6トレンチ 完掘状況（西から）



後円部東西7トレンチ 完掘状況（北から）



後円部東側2区 精査状況（南東から）



くびれ部1 トレンチ 完掘状況（1）（北東から）



くびれ部1 トレンチ 完掘状況（2）（南東から）



くびれ部1 トレンチ 土層堆積状況（1）（西から）



くびれ部1 トレンチ 土層堆積状況（2）（南西から）



くびれ部2 トレンチ 完掘状況（1）（西から）



くびれ部2 トレンチ 完掘状況（2）（北から）



くびれ部2 トレンチ 土層堆積状況（1）（南東から）



くびれ部2 トレンチ 土層堆積状況（2）（南西から）

図版 24 前方部の調査（1）



前方部南北 1-1 トレンチ 土器出土状況（1）（南東から）



前方部南北 1-1 トレンチ 土器出土状況（2）（東から）



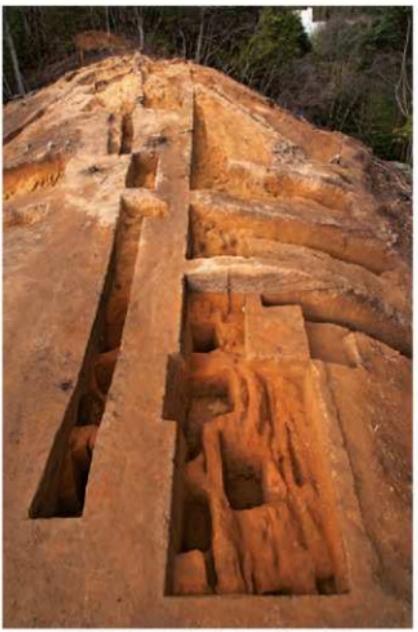
前方部南北 1-1 トレンチ 完掘状況（北東から）



前方部南北 1・2 トレンチ 土層堆積状況（1）（北東から）



前方部南北 1 トレンチ 完掘状況（南東から）



前方部南北 1・2 トレンチ 完掘状況（南から）



前方部南北 2 トレンチ 土層堆積状況（1）（南西から）



前方部南北 2 トレンチ 土層堆積状況（2）（北東から）

図版 26 前方部の調査（3）



前方部東西1トレンチ 完掘状況（1）（北西から）



前方部東西1トレンチ 完掘状況（2）（南から）



前方部東西1トレンチ 土層堆積状況（1）（東から）



前方部東西1トレンチ 土層堆積状況（2）（南西から）



前方部東西2トレンチ 完掘状況（1）（南西から）



前方部東西2トレンチ 完掘状況（2）（南東から）



前方部東西2トレンチ 土層堆積状況（南から）



前方部東西3トレンチ 完掘状況（1）（南東から）



前方部東西3トレンチ 完掘状況（2）（南西から）



前方部東西3トレンチ 土層堆積状況（北東から）

図版 28 試掘確認調査（2020 年度）



試掘 1 トレンチ 完掘状況 (2) (東から)



試掘 2 トレンチ 調査状況 (南から)





常楽寺柿木田 1号墳 土師器



28

土師器 袋（2010年度試掘確認調査）

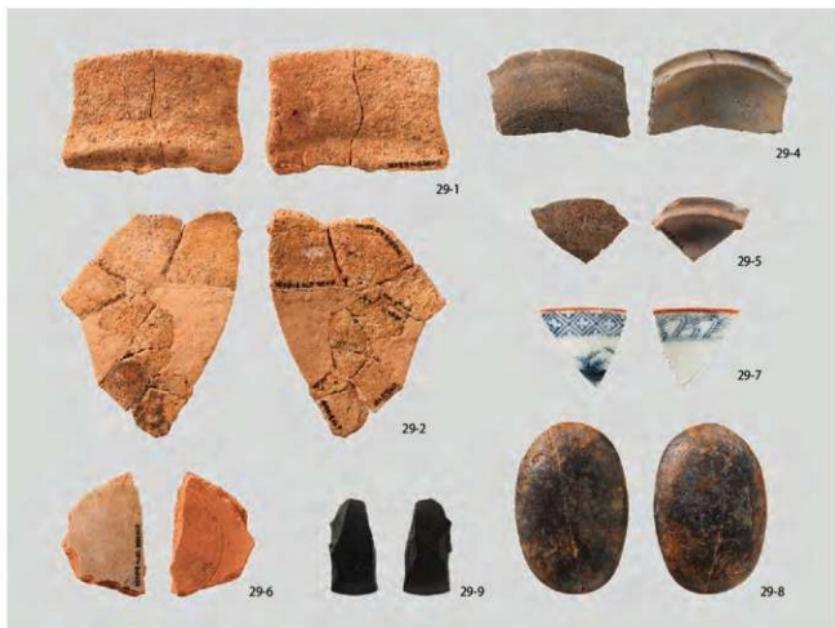


土師器 手捏ね土器（2019年度発掘調査）



28

土師器 順（2010年度試掘確認調査）



弥生土器・須恵器・陶磁器・石器（2019年度発掘調査）

報告書抄録

ふりがな	じょうらくじかきのきだこふんぐん					
書名	常楽寺柿木田古墳群					
副書名	一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	出雲市の文化財報告					
シリーズ番号	46					
編著者名	幡中光輔（編） 奥中亮太					
編集機関	出雲市市民文化部文化財課					
所在地	〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地 TEL (0853) 21-6618					
発行年月日	2021(令和3)年3月30日					
ふりがな	コード	北緯	東経	期間	対象面積	
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号				
常楽寺柿木田 古墳群	島根県出雲市 湖陵町常楽寺 940-5 ほか	32203 (羽板周辺地図)	b 74 35° 18' 27" (羽板周辺地図)	132° 41' 33"	20190902 ～ 20200207 20200714 ～ 20200720	約 1,500m ² 要因 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
常楽寺柿木田 古墳群	古墳	古墳時代前期末 ～ 中期初頭頃	主体部の墓坑・ 後円部墳丘面の礫敷	弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器	古墳時代前期末 ～中期初頭頃の 前方後円墳の 前方後円墳。後 円部で主体部の 墓坑を確認。	
要約	<p>常楽寺柿木田古墳群は出雲市湖陵町常楽寺に所在する。常楽寺柿木田1号墳は、これまでの測量調査や試掘確認調査によって前方後円墳である可能性が指摘されてきた。今回の常楽寺柿木田1号墳の発掘調査では、後円部や前方部の各箇所で墳丘端部が確認でき、前方部南端は後世の造成で削平されていたが、丘陵幅から勘案すると、最大で全長約35mの前方後円墳であると推定できる。古墳の築造時期は、前期末から中期初頭頃と考えられる。</p> <p>後円部上では主体部の墓坑を3基確認した。各墓坑は同一方向に主軸が向けられており、また重複関係ではなく、同時期頃に形成された可能性が高い。なお、後円部上の墳丘面においては、盛土上に敷設された礫敷を確認した。</p> <p>後円部側に近い前方部の墳丘面では、非日常的な用途が想定される土師器の手捏ね土器（ミニチュア土器）が出土した。墳丘上で行われた葬送儀礼の痕跡を示す重要な資料として位置づけられる。</p>					

出雲市の文化財報告 46

常楽寺柿木田古墳群

—常楽寺柿木田1号墳の調査—

一般国道9号（出雲湖陵道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2021（令和3）年3月30日

編 集 出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 烏根県出雲市大津町2760番地
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会
〒693-8530 烏根県出雲市今市町70番地
TEL (0853) 21-6874

印刷・製本 株式会社 報光社